The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む |
| Author(s) | 松井, 太 |
| Citation | 内陸アジア言語の研究. 2019, 34, p. 61-84 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/73677 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 34, 2019.9, 61–84

＝ 批 評 ＝

# 宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む

松 井　　太*

本稿は，宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』上・下（名古屋大学出版会，2018 年 2 月）で扱われる，モンゴル時代とその前後のモンゴル語・テュルク語資料に関わる諸問題について，箚記形式で若干のコメントを提示するものである．

著者の前著『モンゴル時代の出版文化』（名古屋大学出版会，2006 年）は，あくまで「古典的な中國學の手法・傳統」によりつつ，出版文化とその活性化に焦点を当てて，モンゴル支配下の「中國世界」に対する従来の理解を刷新し，モンゴル時代史研究分野における著者の声望を確固たるものとした(1)．その後，著者が中国学の枠を越えてモンゴル時代の東西ユーラシア広域に考察の対象を拡げ，『集史』などのペルシア語史料をはじめ，ラテン語・モンゴル語・テュルク語などの多言語史料群に分け入るに至った経緯については，本書の序文［上巻 66–71］および「あとがき」［下巻 1049–1053］で述べられる．

本書の核心的な重要性は，漢文史料から再構されるモンゴル支配下の東方ユーラシア像を，ペルシア語を中心とする非漢語史料との照合を通じてより具体的に描き出した点，逆にモンゴル支配下のイラン地域で編纂されたペルシア語文献にも中国地域に由来する情報・知識が多数見出されることを，同時代の漢籍についての該博な知見から解明した点にあるといえる．本書によって提示されるモンゴル時代のユーラシア東西の「知」の結びつきの諸相は，特にペルシア語史料を扱うモンゴル帝国史研究やモンゴル時代イラン史研究に大きなインパクトを与えるものであり，その学術的重要性が強調されすぎることはない(2)．また，本書は 2018 年「パジュ・ブック・アワード著作賞」（主催：東アジア出版人会議）の授賞対象ともされ，江湖でも高く評価されている．

さて，モンゴル帝国の支配層の中枢部分が，チンギス王族とその傘下の遊牧モンゴル諸部族，および彼らの同盟者となったテュルク系諸部族により構成されたことは周知の通りである．従って，彼らが日常的に使用し，また漢語・ペルシア語ほかユーラシア各地の諸言語にも借用・導入された種々のモンゴル語・テュルク語の歴史的術語に関する知見は，モンゴル支配の特質を理解する上での関鍵となる［e.g., 本田 1991, 405–456］．著者も，本書の随処でこの点を強調し［e.g., 上巻 69, 436–437, 470, 496, 501, 下巻 862］，漢語・ペルシア語・ラテン語その他の多言語史料にみえるモンゴル語・テュルク語術語とその歴史的背景について，さまざまな解釈を提示している．

---

* 大阪大学大学院文学研究科教授（MATSUI Dai. Professor, Graduate School of Letters, Osaka University）

(1) 高橋文治（書評）「宮紀子『モンゴル時代の出版文化』」『東洋史研究』65-3, 2006, 505–514.

(2) モンゴル時代のイスラーム史料を主に扱う研究者による書評も参照されたい．諫早庸一（書評）「宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』」『史苑』79-2, 2019, 224–243; 大塚修（書評）「宮紀子著『モンゴル時代の「知」の東西』」『史林』102-4, 2019, 98–105.

しかし，これらのモンゴル語・テュルク語術語に関わる著者の解釈・提案には，文献上の用例や文法規則・正書法・字形などの基礎的・一般的知見に鑑みて，受け容れ難いものが少なくない．また，本書を「独自の成果」と自負し［上巻 69–70］，「独創性の保持」を強調する著者の気概［下巻 1053］とは裏腹に，国内外で蓄積されてきたモンゴル時代史およびモンゴル語・テュルク語文献資料に関わる研究成果を看過したための不備も散見する．

これらはもちろん，大著の例として免れ得ない瑕瑾であり，モンゴル時代史の二大基本編纂史料群である漢文史料・ペルシア語史料を博捜して練り上げられた本書の価値を損なうものでは決してない．とはいえ，これらの問題含みの叙述が，本書への高い評価に影響されて，モンゴル語・テュルク語に通じない研究者にもそのまま受容されてしまうのは，学術的には好ましくない．それらの瑕瑾を，モンゴル時代とその前後のモンゴル語・テュルク語文献資料を歴史学的に扱う立場から修正・補足することが本稿の目的である．いきおい本稿は，本書の枝葉末節を殊更に言挙げすることとなり，批評として必ずしも建設的なものとはならないが，モンゴル語・テュルク語資料の歴史学的重要性を標榜する著者の姿勢に賛同してのことである点，あらかじめ諒承を願う．

なお，本書は上巻・下巻あわせて全 5 部 20 章・約 1,200 頁にて多岐にわたる議論を展開しており，モンゴル語・テュルク語に関係する叙述に限っても，その全てを一度に俎上に載せることはできない．本稿では，序章の役割を兼ねる書き下ろしの「口絵解説」および第 I 部・第 II 部を主たる対象とし，残る部分についての批評は別の機会に譲る．

個別の論点に先立ち，本書全体に関わる問題を 2 点指摘しておく．

第一に，本書では，未在証の形式がそれと明記されないまま，しばしば論拠として提示される．14 世紀以前のモンゴル語・テュルク語資料は量的には決して豊富ではないので，在証例に基づく議論と仮定・推定とを常に峻別することが，各種の術語の検討さらにはそれに基づく歴史再構成を空理空論に陥らせないために必要である．

第二に，本書のモンゴル語のローマ字表記は，学界で標準的なウイグル文字モンゴル語（モンゴル文語）の転写方式に準拠しない．評者が通覧した限り，著者のモンゴル語表記は，パクパ文字資料や『元朝秘史』・『華夷訳語』などの漢字音写資料に基づく再構音を示したものと見受けられる．しかし，モンゴル時代以降キリル文字表記の採用に至るまで，ユーラシア各地におけるモンゴル語の表記にはウイグル文字が時間的・空間的にもっとも広汎に使用され，近現代のモンゴル語辞典・文法書類も多くウイグル文字表記の文語形式を前提とする．著者がこれを採用しない理由は本書では説明されないものの，結果として，モンゴル語・テュルク語に関する本書の叙述を諸種の辞典や原資料に遡って確認するためには不便な体裁となっている．また，ウイグル文字表記や正書法に注意しないゆえの誤解も散見し，惜しまれる．

以下，本稿における先古典期ウイグル文字モンゴル語の転写法は Ligeti 1972a，ウイグル文字テュルク語は松井 2017，パクパ文字は栗林・松川 2016，アラビア文字は Deutschen Morgenländischen Gesselschaft 方式，漢語中古音は GSR に，それぞれおおむね準拠する．これにともない，著者が本書に示した表記を改める場合がある．

【1】「Medeia の君主国」［上巻 1］

著者は，いわゆる『カタラン=アトラス（カタルーニャ地図）』がチャガタイ=ウルスを「Medeia の君主国」と称することに言及する．しかし，古代オリエントのメディア王国をさす Medeia という呼称がチャガタイ=ウルスに与えられた理由には説明が無く，読者には疑問が残るだろう．

この「Medeia の君主国（Imperi de *Medeia*）」が，他の西欧史料にチャガタイ=ウルスの呼称としてみえる「中央王国（Imperi de *Medio* / Imperium *Medium*）」の誤解・誤写であることは，つとに指摘されていた［Yule 1866, I, 234–235; Pelliot 1959, 55; cf. 高田 2019, 792］．さらに，この「中央王国」の呼称は，チャガタイ=ウルスがその“国号”とした dumdadu mongγol ulus「中央モンゴル国」というモンゴル語の呼称に由来する可能性がある［Matsui 2009］．

【2】「行在」と「京師」［上巻 4］

南宋の事実上の首都であった杭州臨安府は，イスラーム史料では ḪYNKSAY = Ḫīngsāy / ḪNZAY = Ḫinzāy ~ Ḫanzāy / ḪNZA = Ḫanzā / ḪNSA = Ḫansā，また西欧史料では Quinsai ~ Guinzai ~ Cansay ~ Camsay ~ Chansay ~ Campsay などと表記される．これらの表記がいずれも杭州の通称「行在」（パクパ字音 heiŋ-cay / γaŋ-cay）に由来することは，まず藤田豊八・那珂通世・桑原隲蔵らにより提唱され［藤田 1913, 443–445; 那珂 1915b, 17–18; 桑原 1923, 35–41＝桑原 1989, 55–60］，国際的にもおおむね承認されている［e.g., Moule 1957, 8–11; ǦT/Boyle, 282; 家島 2002, 123］．

これに対し，著者は本処［上巻 4］で，『集史』のペルシア語表記 ḪYNKSAY = Ḫīngsāy ~ ḪNKSAY = Ḫingsāy の語頭の Ḫ- ( خ ) を Ǧ- ( ج ) と校訂して Ǧīngsāy ~ Ǧingsāy と修正し，「京師／行在」と説明する．その他のペルシア語史料の Ḫīngsāy, etc. の用例のいくつかについても，語頭を Ǧ- とは改めないものの，原語として「京師」と「行在」を併記する［下巻 726, 789, 1024］．『集史』と同様にラシードゥッディーン（Rašīd al-Dīn）の編纂になる『踪跡と生物（*Kitāb-i Āṯār wa Aḥyā*）』の一節も，「蛮子（マンジ）の諸州／路のうち，省都でどの諸城よりも大きい HNYKYSAY > Hangsāī 行在（＝杭州）と呼ばれる封土（＝路）に生えている．この封土は，ḪYNGYSAY = Khīngsāī 京師として知られている」と引用される［下巻 986. 転写は原文ママ］．一方，『カタラン=アトラス』の Cansay や『ワッサーフ史（*Tārīḫ-i Waṣṣāf*）』の Ḫanzāy ~ Ḫinzāy については「行在」とのみ称して「京師」を併記しない［上巻 3; 下巻 929］．このように，著者の叙述はやや一貫しないものの，それらを通覧すれば，杭州をさす Ḫīngsāy ~ Ḫanzāy などのペルシア語表記には「行在」ではなく「京師」に由来するものも含まれ，かつそのペルシア語形式の語頭は Ǧ- と発音された可能性もある，というのが著者の見解と推量できよう．

イスラーム史料の Ḫīngsāy ~ Ḫinzāy, etc. および西欧史料の Quinsai ~ Cansay, etc. の語源を「京師」に求める説は著者の独創ではなく，古く 19 世紀にまで遡る［e.g., Pauthier 1865, II, 485; Yule 1866, I, 113］．しかし，この「京師」説は，「行在」説を採る諸先学により，ほぼ全面的に斥けられている．北宋の故地回復を国是とした南宋にとって，「京師」とはあくまで旧都の開封（汴京）であり，杭州は「行在」・「臨安」すなわち臨時首都に過ぎなかったからである．特に桑原は「南宋の

公私の記録は，みな杭州を指して行在とこそいえ，決して京師と称せず」と断言する［桑原 1923, 37＝桑原 1989, 57］．現時点で「京師」説を再提起するならば，南宋時代に遡って杭州が「京師」と称された実例を新たに提示することが期待されるものの，本書ではそれは示されない．

桑原らが利用し得なかった，モンゴル時代のペルシア語史料にみえるアラビア文字表記の漢字音も参照に値する．本処［上巻 4］で紹介される『集史』クビライ紀の行省（P. šīng < Chin. 省）列挙記事では，ḪYNKSAY = Ḫīngsāy とともに南京 > Namkīng, 京兆府 > Kīnǧānfū が言及され［ǦT/TS, 207b; cf. ǦT/Boyle, 282–283; Pelliot 1963, 813–814, 790］，その直前の行政単位名を紹介する記事でも「京」を KYNK = kīng (~ gīng) と音写する［ǦT/TS, 206b; cf. ǦT/Boyle, 277］．また，著者［下巻 591］が現存『集史』「中国史」の最古・最良写本とする Hazine 1654 写本も，ḪNSAY = Ḫinsāy とともに洛京 > Lāwkīn ~ Lākīn，京兆府 > Kūnḥūnf [sic!] (~ *Kīnǧawfū?) に言及し，京と同じ見母の漢字（金・紀・冀・甲・景・敬など）の音写においても，語頭子音にはおおむね K 字を用いる［Isahaya/Endo 2017, 128, 130, 140, 153, et *passim*］．『イルハン天文便覧（*Zīǧ-i Īlḫānī*）』でもこの見母の扱いは同様であり［Endo/Isahaya 2016, 5］，本書第 19・20 章で検討される『珍貴の書（*Tanksūq nāma*）』も，見母を K (= k) もしくは [g] を示す特殊文字 (ĝ) で音写する［遠藤 2016, 38, 75–76］．以上の諸例に基づく限り，モンゴル時代の漢語の京（パクパ字音 giŋ）はペルシア語で一般に kīng ~ gīng と音写されたと考えられ(3)，京師 > Ḫīngsāy という音写は想定できない．さらに，『珍貴の書』は「行」を ḫīnĝ ~ çīnĝ ~ cīnĝ（ç, c̓は暁匣母拗音を示す特殊文字）と音写しているから［遠藤 2016, 38, 79, 113］，行在 > Ḫīngsāy ~ Ḫingsāy という通説があらためて傍証される(4)．

著者は Ḫīngsāy, etc. の解釈に際して，「『高昌訳語』「来文」では，“京師”は，ウイグル文字で Qingšai と表記される」ことにも注意を促している［下巻 789］．しかし，この「京師」を指すウイグル語は明瞭に KYNKŠY = kingši と表記されており［cf. Ligeti 1967, 278, et *passim*;『北京圖書館古籍珎本叢刊』6, 書目文獻出版社, 239–324,『高昌館課』］，著者が語頭を q, 語末を -šai とするのは誤読である．一方，敦煌出土の元代ウイグル語文書には「行在」の借用形式として A.-P. Ḫīngsāy と正しく対応する XYNKS'Y = qïngsay (~ xïngsay) が在証されており［森安 2015, 492–495, 499–501］，その字形は「京師」をさす kingši とは明らかに異なる(5)．また，諸種のイスラーム史料にみえるウイグル文字・アラビア文字の対照表でも，ウイグル文字 K (= k/g) はアラビア文字 Ḫ には対応しない［e.g., Arat 1937, 7–13; Shahgoli 2017, 165］．従って，ウイグル語 kingši「京師」を A.-

(3) 鼻音韻尾 -ŋ はペルシア語では正確に反映されない場合もある［cf. Endo/Isahaya 2016, 8］．

(4) なお，著者が本処［上巻 4］で Ḫīngsāy ~ Ḫingsāy の語頭の Ḫ を Ǧ に修正するのは，漢語における見母の舌面音化（[k] > [tɕ]）がモンゴル時代にすでに進行していたという見解に基づくのかもしれないが，従えない［cf. 遠藤 1990, 30–36］．中華地域に遺存する蒙漢合璧碑でも，見母はほとんどの場合ウイグル文字 K (= k/g) あるいはパクパ文字 g で表記される［e.g., 中村・松川 1993, 83; 照那斯圖 1991, *passim*; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, *passim*］．

(5) 漢語の京をウイグル文字で KYNK = king ~ ging と音写する例として，オロンスム発現の泰定四年（1327）漢文・ウイグル文字テュルク語・シリア文字テュルク語三体合璧墓誌［牛汝極 2008, 67–72］の京兆府 > Uig. kingčao(p)[u] (~ Syr. kyng-ṣ'w-pw) や，明代の『続増華夷訳語』［『北京圖書館古籍珎本叢刊』6, 書目文獻出版社, 160］の京畿：京都兒 < M. ging-tür「京（> ging）に」という対訳例も参照できる．

P. Ḫīngsāy ~ Ḫinzāy, etc. に関連させることはできない．

なお，著者が随処で「行在」と「京師」を併記するのは，上掲の『踪跡と生物（*Kitāb-i Āṯār wa Aḥyā*）』が杭州に HNYKYSAY と ḪYNGYSAY の両様の呼称を与えることに基づくのかもしれない．しかし，この両様の表記は，おそらく「行在」の杭州現地音（> Ḫīngsāy ~ Quinsai ~ Qīngsay, etc.）と江南音（> Cansay ~ Chansay, etc.）の相違［森安 2015, 500–501］の反映であり，従って双方に異なる語源を想定する必要は無いと考えられる．いずれにせよ，著者が利用した，Ī. Afšār による『踪跡と生物』校訂本の当該箇所の綴字は明らかに不自然であり，良写本に基づく再検討が必要であろう．

【3】亦即納と Īšīq ~ Īsāq［上巻 11–12］

中国内蒙古自治区のカラホト遺跡は元代の亦集乃路総管府の遺址である．この「亦集乃」とは，西夏語 ²zyIr ¹nya「黒河（←水＋黒い）」に由来するモンゴル語イシナ（Isina ~ Isinai）(6)の漢字音写であり，『聖武親征録』には「亦即納」という異形で音写される(7)．『聖武親征録』に並行する『集史』チンギス紀の記事は，「亦即納」に相当する地名を AYŠYQ = Īšīq とペルシア語表記し(8)，さらに『集史』ケレイト部族志には AYSAQ = Īsāq という異形式が現われる．

著者は本処［上巻 11–12］で，この亦即納と Īšīq ~ Īsāq の音韻上の不一致について，『集史』チンギス紀の AYŠYQ = Īšīq を AYŠNQ = Īšinaq と修訂し，さらに *AYSNAQ = *Īsināq という形式を仮定して，これらをイシナの「テュルク語での古称を正確に表わす」ものと推定する．しかし，当地を īšinaq ~ *īsināq と称する例が他のテュルク語文献から引証されるわけではなく，同じく西夏語 ²zyIr ¹nya に由来する M. isina ~ isinai との乖離も十分に説明できない．

周知の通り，『集史』・『聖武親征録』の編纂には，『金冊（Altan Debter）』や『脱卜赤顔（< M. tobčiyan）』などと称されるウイグル文字モンゴル語文書資料が共通の情報源とされた．この点に鑑みれば，『集史』の īšīq ~ īsāq というアラビア文字表記は，モンゴル語原資料での ’YSYN’ = isina（> Chin. 亦即納）というウイグル文字表記が ’YŠYQ = išiq あるいは ’YS’Q = isaq と誤読されたことに由来すると考えられる．ウイグル文字草書体の S/Š は加点が無ければほとんど区別できず，また語末の -N’ (= -na/-ne) の筆致も -Q (= -q/-γ) ~ -’Q (= -aq/-aγ) と辨別しがたいからである(9)．

【4】qamdu［上巻 14］

モンゴル帝国の交鈔に関連して，著者は，11 世紀後半のカーシュガリー（Maḥmūd al-Kāšġarī）『テュルク語辞典（*Dīwān Luġāt al-Turk*）』が西ウイグル王国の通貨として伝える qamdu という布帛に言及し，「お札にしては異様に長いので，為替手形の可能性もある」と注記する．

---

(6) 本処で著者が示すウイグル文字モンゴル語形式 yisina ~ yisinai は，MDQ, Nos. 018, 022, 022 に依拠したものと推測されるが，いずれも語頭は aleph とみて isina ~ isinai と修正すべきである．

(7) 那珂 1915a, 59; 王國維「聖武親征録校注」『王觀堂先生全集』12, 文華出版公司, 1968, 5197.

(8) Cf. 余大鈞・周建奇（訳）『史集』第 1 巻第 2 分冊, 商務印書館, 1983, 184.

(9) 一例として，本稿【19】で言及する，太宗オゴデイ十二年庚子（1240）十方大紫微宮懿旨碑ウイグル文字モンゴル語添書の ₃qulaγana = QWL’Q’N’ と ₁bolγaγ = BWLQ’Q の筆致を参照［Matsukawa 2007, 298］.

しかし，この qamdu が西ウイグル時代のウイグル語文書にみえる quanpu ~ qanpu ~ qunpu「官布（Chin. > Uig.）」に相当すること，またこの「官布」が公定規格の保証のもと通貨的に流通した布帛（主に棉布）であり，その規格も唐代の匹端制を踏襲していたことは，すでに縷々論じられている［森安 1991, 53–54; 森安 2015, 152–153, 461–462; Özyetgin 2004, 94; 田先 2006］．従って著者の注記は無用であった．念のため，カーシュガリーの QMDW قمدُو = qamdu はおそらく *QNBW قنبو = qanbū ~ qunbū (< Uig. quanpu ~ qanpu ~ qunpu) の誤写と考えられる．

【5】ガイハトゥ（Qayiqa-tu）［上巻 18–19］

第 5 代フレグ=ウルス当主イリンチン=ドルジ（Tib. rin chen rdo rje > M. Irinčin-Dorǰi > P. Irīnǧīn Durǧī, r. 1291–1295）は，ペルシア語史料ではほとんどの場合 KYḪATW という別名で記録され，これは慣習的にガイハトゥ／ゲイハトゥ（Gayḫātū / Geyḫātū）と表記される．著者も「ガイハトゥ」を採りつつ［下巻索引 1065］，この人名がモンゴル語 Qayiqa-tu「神威／驚奇もつ」に由来すると説明する［上巻 18–19］．この表記・訳語からみて，著者はこのモンゴル語人名を名詞 qayiqa「神威／驚奇」に共同格 +tu が接尾した形式と理解したものと推測される．

これと同様の解釈はまず d'Ohsson によって示された［d'Ohsson 1835, 82; cf. 佐口 1976, 262］．また，漢文・ペルシア語史料にみえるモンゴル王族名を比較対照した Hambis も，このペルシア語表記 KYḪATW に対してモンゴル語 Qaiqatu を再構している［Hambis 1945, 91, 93］．

しかし，この人名再構には多々難点がある．既知のモンゴル語文献に *qayiqatu ~ *qaiqatu「神威／驚奇もつ」あるいは *qayiqa ~ *qaiqa「神威，驚奇」という語は在証されない．動詞の γayiqa- ~ γaiqa-「驚く，珍しがる；称讃する」は確認されるものの［Kowalewski II, 976; Lessing, 345; MKT, 732］，モンゴル語には deverbal noun を形成する接尾辞 *-tu は存在しない．また，ウイグル文字 Q (= q/γ) は，アラビア文字では多くの場合 K/G ではなく Q/Ġ/Ḫ に対応するので［cf. Arat 1937; Shahgoli 2017, 165; 本稿上述【2】］，M. *Qayiqatu > P. Gayḫātū という借用は考えづらい．以上の難点は，Hambis に註釈を提供した Pelliot もつとに指摘していた［Pelliot 1963, 816］．著者がこれらを等閑視して，あえて *qayiqa-tu「神威／驚奇もつ」を現時点で提案する意図は不明である．

ペルシア語 KYḪATW に対応するウイグル文字モンゴル語としては，ティムール朝期のいわゆる『バイスングル=アルバム（Baysungur album）』所収のフレグ家系図に K'YQ'DW という表記が在証されている［MS., İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Hazine 2152, 32a; cf. Sertkaya 1981, 258］．また『五分枝（*Šu'ab-i Panǧġāna*）』のフレグ家系図も，ペルシア語の KYḪATW に KYQ'DW というウイグル文字モンゴル語表記を添える［MS., İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet 2937, 144b］．これらの表記からは，Keiqatu ~ Geiqatu / Kiqatu ~ Giqatu というモンゴル語人名を再構できる．これを固有のモンゴル語とみなすならば(10)，Keiqatu ~ Geiqatu は母音調和原則

(10) 『シャイフ=ウワイス史（*Tārīḫ-i Šayḫ Uways*）』写本はイリンチン=ドルジの名を本文では KYḪATW と表記するのに対し，その治世の章題では KYQATW とする［J. B. van Loon (ed.), *Ta'rīkh-i Shaikh Uwais*, The Hague, 1954, fol. 140］．一方，16 世紀以降編纂のサファヴィー教団の財産目録 *Ṣarīḫ al-Milk* にも KYĠATW という表記がみえる［MS., Tihrān, Mūza-i Millī-i Īrān 3718, fol. 109a］（以上，高木小苗（早稲田大学）女史

に反するので，消去法的に Kiqatu ~ Giqatu という形式が支持される(11).

この kiqatu ~ giqatu という語も諸種のモンゴル語辞典にはみえず，語義は確定できない．試案として，kiqaγa (< v. kiqa-)「威嚇，誹謗，脅迫」［MKT, 627; cf. Kowalewski III, 2523］に共同格 +tu が接尾した *kiqaγatu「威嚇者(?)，脅迫者(?)」を仮定し，*Kiqaγatu > *Kiqa'atu > Kiqatu (> P. Kīḫātū, etc.) と転訛したと推測できるかもしれないが，確証は無い．いずれにせよ，Kiqatu (< *Kiqaγatu?) という形式は，マルコ=ポーロ『世界の記』諸本の Chiato ~ Quiacatu ~ Chiacato ~ Chyacato などの諸表記［Pelliot 1963, 816; cf. 高田 2013, 30–32］にも整合するように思われる．

なお著者は，イリンチン=ドルジの名が「令旨」にも使用されるという［上巻 18］．念のため，フレグ=ウルス当主イリンチン=ドルジに言及する命令文書現物としては，692/1293 年発行ペルシア語文書の 1 通のみが知られる［Soudavar 1992, 34–35; cf. PUM, 3, Urkunde A; 四日市 2015, 270–271］．ただし，この文書の発令者は財務長官（ṣāḥib-i dīwān）のサドルッディーン=アフマド（Ṣadr al-Dīn Aḥmad）であり，イリンチン=ドルジは発令者ではなく権威の所在として言及される［PUM, 11, 14; 松井 2015, 57, 60］．従って，本文書はチンギス家男性王族発行の命令としての「令旨（> M. lingǰi ~ P. līngǧī）」には該当しない．著者のいう「令旨」の具体的情報を知りたいところである．

【6】撒的迷失［上巻 22］

『重建懐聖寺之記』碑の書丹者の名「撒的迷失」を，著者は「サルディミシュ／サディミシュ」とカタカナ表記する．著者は彼を「ウイグル」と明記するから，この人名をテュルク語（動詞語幹に完了形動詞 -mïš/-miš が接続した形式）とみなしていると思われる．一方，本書の他処では，同じ漢字表記人名「撒的迷失」が「サルドミシュ」とも表記される［下巻索引 1072］．

しかし，「サルディ／サディ／サルド」のいずれにせよ，これらのカタカナ表記に相応しいテュルク語の動詞語幹（*saldï- / *sardï- / *sadï- / *sard- / *sald-, etc.）は知られない．つとに指摘されているように，この漢字表記にはテュルク語のサティルミシュ（Satïlmïš, 原義は「売られた者」）を再構すべきである［Cleaves 1953, 99; cf. PTMD, 672］．この人名はアラビア語・ペルシア語史料にも Satilmīš ~ Sātilmīš と借用され［e.g., Bosworth 2001, 309; Matsui/Watabe 2015, 48］，また漢字音写の異形として撒忒迷失・薩的彌識・撒的里迷失・撒的里彌釋なども確認される．

【7】「シリア語」の墓誌［上巻 23］

著者が本処で，14 世紀の「シリア語の墓誌では，Alaqsandoros qan アレクサンドロス大王のギリシャ暦と Tabγač（拓跋・桃花石＝漢児）／テュルクのそれを併記する」と述べるのは，厳密には不正確である．評者が確認し得た限り，モンゴル時代のシリア語墓誌は，セレウコス暦と十二支紀年（しばしば ṭwrk'yt「テュルクの」と称される）を多く併記するものの［Chwolson 1886, 5; Chwolson

からご教示を頂戴した．特記して深謝する）．これらのペルシア語史料における KYḪATW ~ KYQATW ~ KYĠATW という表記の相違は，この人名が少なくとも固有のペルシア語ではないことを示唆する．

(11) ただし，非モンゴル語（漢語やウイグル字音など）に基づく人名と想定するならば，K'YQ'DW = Keiqadu ~ Geiqadu, さらには Kaiqadu ~ Gaiqatu という再構案も排除できない．

1890, 7–8; Chwolson 1897, 3; Bazin 1991, 413–429］，「漢人，漢地（Syr. ṭ'b''ṣ ~ ṭ'bk'ṣ ~ ṭ'bx'ṣ < T. tabγač ~ tavγač）」の暦について言及するものは無い(12)．「漢人の暦算（T. tabγač ~ tavγač saqïšï）」に言及するのは，テュルク語（シリア文字またはウイグル文字）の景教徒墓誌に限られる［cf. 牛汝極 2008; Niu 2009; Eccles/Lieu 2012］．なお，テュルク語景教徒墓誌で，この「漢人の暦算」が「テュルクの暦算（Türk saqïšï / Türk sanï）」と相互置換的に用いられる点は，モンゴル時代ユーラシアの暦文化の交流を考える上で注意されるべきであろう．

【8】也先鉄木児［上巻 37］

モンゴル人名の「也先鉄木児」に対する著者のカタカナ表記「イェスンテムル」は，Yesün-Temür (~ Yisün-Temür) というモンゴル語人名を想起させる．しかし，漢字音写の「也先」は一般的には M. esen (~ T. äsän > P. īsān ~ īsan)「健康，安康；安寧」に用いられるので（yesün ~ yisün「九，9」の漢字音写はおおむね「也孫」），本処でも「エセンテムル（Esen-Temür）」を再構すべきである．人名「エセン（Esen）」と「イェスン〜イスン（Yesün ~ Yisün > P. Yīsūn）」を混同する誤解は専門研究者の学術論文にも散見するので［e.g., 四日市 2015, 297］，あえて注意を喚起しておく．

【9】猟犬係［上巻 38］

「世祖出猟図」にみえる猟犬係について，著者はそのモンゴル語の呼称を「güyüči（跑(はし)る者）／güilegeči（放犬捕牲）」とする．これは，マルコ=ポーロ『世界の記』で言及される猟犬係 ciuici の原語を「quyuči / quyu'uči 索(もと)める者 güyüči 貴赤／跑(はし)る者 güilgeči 放犬捕牲」とする，本書第 9 章の叙述［上巻 440］と照応するものとみられる．しかし，マルコ=ポーロの ciuici が M. güyügči（> Chin. 貴由赤〜貴赤）に由来することは，KWYWKČY = gūyūgčī ~ KYWKČY = guyūgčī というペルシア語借用形式からも明瞭である［Pelliot 1959, 572–573; 杉山 2004, 351–353; cf. PTMD, 548; 本書下巻 810, 815］．索引［下巻 1114］も含めて，本書中の güyüči は güyügči の単なる誤植であろうが，「quyuči / quyu'uči 索める者」や「güilgeči 放犬捕牲」の提案は不必要に思われる．

ちなみに，著者の「quyuči / quyu'uči 索める者」は，『元朝秘史』や『華夷訳語』の v. quyu-「求める（= M. γuyu-）」から推定された表記らしいが，文法的にはあり得ない形式である(13)．著者は索引にも「quyu'uči 貴由赤」を掲げるが［下巻 1114］，モンゴル語の /qu/ が「貴」（パクパ字音 guė）で表記されたとは考えづらく，貴由赤 < güyügči という従来の理解を改める必要は無い．念のため，ウイグル文字の Q と K は別字であるから，v. quyu- ~ γuyu- からの派生語を güyügči > P. gūyūgčī に関連づけることも不適切である．

---

(12) シリア語墓誌にも人名要素としての ṭ'bg'ṣ = T. tabγač の用例は確認される［Chwolson 1890, 36, No. 3,1 (121)］．ちなみに著者は，『経世大典』站赤門にみえる「拓跋之地」が，『元典章』所収の同一案件の直訳体版で「禿博田地」とされることを指摘する［上巻 508］．しかし，この「禿博」（パクパ字音 t'u-baw）は，「托鉢」（*t'aw-bvo ~ *t'vo-bvo）・「土鉢」（t'u-bvo）［『永楽大典』巻 19417, 3a, 11a; 同巻 19424, 4b］と同じく，M. töbüd「チベット」の漢字音写である．『経世大典』の「拓跋」（t'aw-pvo）は，案件を吏読訳する際に「禿博」の類音の漢語として選択されたものと思われ，T. tavγač「漢人，漢地」には由来しない．

(13) 動詞語幹には +či は接尾しない．また，モンゴル語には -'uči (= -γuči) という名詞形成接尾辞は無い．

【10】豹［上巻 41–46］

漢文史料にみえる「豹；彪；虎；獅子」と，これらに対応するペルシア語・モンゴル語・テュルク語の名称・呼称については，陳新元 2016 も類似の考証を提示しているが，詳細さでは本書が上回る．生物学上の学名も併記されていれば，さらに読者の理解を助けたであろう．

本処で示される考証のうち，『至元訳語（蒙古訳語）』で漢語の「豹」に対訳されていた「吉里必枝兒鬼」について，吉里必兒枝鬼 ＜gil birjigüi「くっきりびっしり小さな斑点の有るもの」という校訂・再構を新たに示したのは卓見である(14)．ただし，冒頭の吉里 ＜*gil は諸種のモンゴル語辞典にみえず，説明を要する．また，後半の birjigüi を v. birǰii-「顯出密密麻麻的小斑點」［MKT, 466］からの派生語とみなしたのであれば，birǰiküi ~ birǰiiküi と転写すべきではないか(15)．

【11】唐昭陵の突厥可汗の称号［上巻 46］

本処では，太宗時代に唐に服属した諸勢力の君長として「突厥の il-qa’an や nizak čerbi qa’an」が言及される．前者の il-qa’an は頡利可汗（阿史那咄苾），後者の nizak čerbi qa’an は泥孰俟利苾可汗（阿史那思摩）の原語を表記したものと思われる．

可汗（中古音 *k’â-γân）は，周知の通り，鮮卑・柔然から突厥・ウイグルなどのテュルク遊牧民に継承され，突厥ルーン文字・ウイグル文字テュルク語で qaγan と表記された称号の漢字音写である．しかし，7 世紀前半の段階で，著者の示す qa’an のように語中の /γ/ が脱落していたとは考えづらい．ごく最近，モンゴル系言語（Para-Mongolic）を記していることが解明されたブグト碑文ブラーフミー文字面（6 世紀末）・フイス=トルゴイ（Khüis-Tolgoi）碑文（7 世紀初頭）では，この称号は k̄a $g_1$a n とブラーフミー文字表記され［Maue 2018; Vovin 2018; Maue 2019; Vovin 2019］，ブグト碑文ソグド文字面では x’γ’n と表記される［吉田 2019］．チベット語 kha gan, マニ文字中世ペルシア語 xng’n [sic!], ギリシア語 χάγαν ~ χαγάνος, ヘブライ語 KGN = kagan (~ xagan), アラビア語・ペルシア語 ḫāqān など，10 世紀以前の諸言語の表記も，おおむね語中の /γ/ を反映する［e.g., Golden 1992, 71; Erkoç 2008, 23; 森安 2015, 50–64］．ちなみに，ペルシア語に定着した ḫāqān は，モンゴル時代にはフレグ=ウルス・チャガタイ=ウルス君主の美称としても用いられた［井谷 2011, 13–17; ED, 609; Schwarz 2002, 168, Nr. 1502; Nyamaa 2005, 79, 182, 186–188］．T. qaγan（> 可汗）を継承した称号は，モンゴル皇帝の専称としての M. qaγan ~ qa’an > P. qān ~ qā’ān だけではない．

頡利可汗の称号の頡利 *γiet-lji については，著者のように単音節の il (~ el)「国，国民」とみなすより，伊利 *·i-lji ・伊力 *·i-l̥iək と同様，illig ~ ilig (~ ellig ~ elig)「国もてる（者）；王」［cf. 鈴木 2005, 46］を再構するのが妥当であろう(16)．

---

(14) Ligeti/Kara は，吉里必枝兒鬼を girbi girgüi (~ girbigirgüi) と再構し，豹に対する禁忌表現と推測するにとどまっていた［Ligeti/Kara 1990, 272; Kara 1990, 297, 322–323］．

(15) なお，吉里を含めた漢字音写からは，gilbelǰeküi「光る／きらめくもの（< v. gilbelǰe-）」［cf. Kowalewski III, 2534; Lessing, 382; MKT, 766］も想定できるかもしれない．とはいえ，これが「豹」に転意する過程は論証できず，積極的な別解とはできない．

(16) 「頡」1 字で il ~ el に対応させられることは，ウイグル可汗や宰相の称号中の頡翳德蜜施 < el etmiš，頡咄登蜜施 < el tutmiš，頡於迦斯 < el ögäsi などから類推できる［e.g., 森安 1991, 182–183, 127–128］．

「泥熟俟利苾可汗」には，さらに乙弥 *·i̯ĕt-mjię̯ という称号の要素が先行していることに，著者は言及しない．この乙弥は，突厥可汗の美称として漢文史料に散見する乙毘 *·i̯ĕt-b'ji の異表記とみなされ［稲葉 2010, 684–683］，またその乙毘は，7 世紀初頭の昭蘇県石人ソグド語銘文にみえる称号 'yr-p'y に対応する可能性がある［吉田 2011, 4］．

泥孰を nizak と転写するのは，稲葉穣の専論に基づくものであろう．これはアラビア語史料では nīzak と表記され，おそらく非テュルク語（可能性としてはエフタル語）に由来する称号と考えられている［稲葉 2010］．

後続の俟利苾 *dz̩'i-lji-b'i̯ĕt に著者がモンゴル語 čerbi「侍従；宰相」を再構するのは，おそらく本書第 10 章［上巻 511–512］の議論を反映する．しかし，俟利苾が正しくは伜利苾 *i̯ĕt-lji-b'i̯ĕt であり，古代テュルク語の eltäbär ~ iltäbär の音写であることは，俟利發・意利發・頡利發・希利發・奚利邲などの漢字音写表記や，ソグド語 'yrtp'yr ~ ryttpyr ~ δyttpyr ~ lytβyr, バクトリア語 νιλιτοβηρο, アラビア語 rutbīl ~ yilṭawār, アルメニア語 'iłit'vēr ~ lit'bēr などの用例からも，ほぼ確実に推定される［e.g., 護 1967, 398–438; Bombaci 1970; Erkoç 2008, 184; Kasai 2014, 81, 124; 吉田 2018］．一方，M. čerbi に関連づけられる突厥・ウイグルおよび古代テュルク遊牧集団の官称号は 6–12 世紀の諸言語史料（テュルク語・ソグド語・中世ペルシア語・パルティア語・チベット語・コータン語・バクトリア語・トカラ語・アラビア語・近世ペルシア語・ギリシア語・漢語など）に見出せない．Doerfer の掲げる近世ペルシア語史料中の čerbi の借用例も，すべてモンゴル時代以降に属する［TMEN I, Nr. 176］．同時代の在証例を缺いたまま，あえて M. čerbi を突厥時代に遡らせて eltäbär ~ iltäbär に替えるのは，奇を衒いすぎるものという印象を否めない(17)．そもそも，漢字表記の音価のみに基づく非漢語の原語再構は，著者自身が「本末転倒の研究方法」［上巻 495］と批判するところである．

【12】トルイ四子の名［上巻 48］

トルイ嫡出のモンケ・クビライ・フレグ・アリク=ブケ四兄弟の名について，著者はそれぞれ「Möngke/Mängü 長生（とこしえ），Qubilai 分与（わけまえ），Hüle'ü 多余，Ariq-böke（ママ）神聖な力有る的（もの）／清浄なる力士」と解釈し，「長子と末子の優遇が明白な命名である」という［上巻 48］．

しかし，クビライの名 qubilai は，M. qubi「分け前；天分」とは別形式であり，v. qubila-「分与する」から派生した「（恩恵を）分け与える者」と解される［cf. Pelliot 1959, 565–566］．またフレグ hülegü ~ hüle'ü ~ ülegü (> ilegüü) には「余り，残り」だけでなく「より良い，優れた」の語義もある［Lessing, 1005, 405; MKT, 167; Kowalewski I, 524; cf. Pelliot 1925, 236–237］．これらの語義に鑑みれば，彼らが命名に際してモンケやアリク=ブケより冷遇されたとは断言できないようにも思われる．以上，PTMD, 451–453, 111–112 も参照．

(17) 著者は本書第 10 章でも，漢字音写された鮮卑・突厥など古代遊牧民の官称号について，10 世紀頃に確立したウイグル字音や，モンゴル時代以降のアラビア語・ペルシア語史料を利用した原語再構を提案する．しかし，その多くは説得的とは言い難い一方，いくつかの妥当とみなせる再構案は，すでに諸先学により提示されているものと本質的に変わらず，新規性を缺く．この点は別の機会に指摘したい．

【13】罟罟［上巻 50–51］

既婚モンゴル女性が着用する特殊な冠帽ボクタク（M. boγtaγ > P. buġtāq ~ būqtāq ~ buġṭāq, etc.）が，漢文史料では罟罟・故故・顧姑・故姑・固姑などと称されたことは周知の通りである．従って，著者が本処で「罟罟帽（ボクタク）」と読みがなを付すのは，実態を示すものとしては誤りではない．

ここでは，罟罟があくまで漢語と考えられる点を補記しておく．従来の研究は，罟罟・故故などの多様な漢字表記を，モンゴル語を音写したものとみなしてきた［方齡貴 1991, 296–313 および引用文献を参照］．しかし，『至元訳語（蒙古訳語）』の故故：播庫脱 ＜M. boγtaγ という対訳例［Kara 1990, 285］は，故故（～罟罟, etc.）が漢語と認識されていたことを示す．また，『元史』郭宝玉伝によれば，すでに金朝末期（チンギスの対金遠征以前）の華北において，「罟罟」はモンゴル高原の遊牧民の既婚女性の冠帽をさす漢語として人口に膾炙していた(18)．これらの点をふまえ，蔡美彪は，ボクタクが鳥の羽毛で装飾されていたため漢人はこれを鳥の声の擬音で呼び，擬音ゆえに罟罟～故故～顧姑～故姑などの多様な表記が生じたと推測している［蔡美彪 2012, 536–540］．その当否はさておき，著者が本処で言及するように，『華夷訳語』のウイグル語語彙集の諸刊本も罟姑帽：土馬哈卜兒克 ＜Uig. tomaγ-a börk という対訳例を示しており(19)，罟姑（～罟罟）がやはり漢語であってウイグル語に由来しないことを示唆する．

ちなみに，トゥルファン出土のモンゴル時代のウイグル語文書には，衣服や布帛（絹）に関係して KWYKW = kükü (~ kökü) という語が確認される：*U 9004 (= USp, Nr. 38), 8–9šamis-kä ton-qa kükü-kä bir böz berdim「シャミスへ，衣服と kükü として 1 棉布を支払った」；SI 5591 (= SI Kr IV 638), 34,36,90kükü-lük (~ kükülük) torqu「kükü 用の絹」．これらの kükü は罟罟～故故～顧姑の借用語かもしれない(20)．ウイグル人女性がモンゴルと同様のボクタク＝罟罟～故故を使用していたことは，クビライ期のウイグル人高官ムングスズ（Mungsuz > 孟速思）一族を描いた印刷仏典［Franke 1978］や，トゥルファン地域の仏教石窟壁画に描かれた女性供養人像からも確実である(21)．

---

(18) 『元史』巻 149, 郭宝玉伝「金末，封汾陽郡公，兼猛安，引軍屯定州．歳庚午（1210），童謠曰：“搖搖罟罟，至河南，拜閼氏”．既而太白經天，寶玉歎曰：“北軍南，汴梁即降，天改姓矣！”」．

(19) 『北京圖書館古籍珎本叢刊』6, 書目文獻出版社, 91, 397, 447（いずれも「罟姑」の「姑」は网頭「皿」をもつ異体字）．なお，著者は Uig. PWYRK = börk「帽子」を bürq と誤る．ちなみに，Uig. tomaγ-a ~ tomaγa は冠帽の一種をさす M. tomuγa の借用語である［Ligeti 1966, 266–267］．この tomuγa は v. tomu-「撚る，紡ぐ」から派生した名詞と考えられ，元代には脱木華と漢字音写される［Cleaves 1954］．『析津志』は「罟罟，以大紅羅幔之．‥‥‥以大長帛御羅手帊重系於額，像之以紅羅束發，峩峩然者名罟罟．以金色羅攏髻，上綴大珠者，名脱木華」［『析津志輯佚』北京古籍出版社, 2000, 205–206］といい，罟罟と脱木華 (< tomuγa) には，装飾の特徴に相違があったことを示唆する．従って，『華夷訳語』の罟姑：土馬哈 ＜Uig. tomaγa (< M. tomuγa) の対訳も実態を反映するものか，注意を要する．

(20) 後者の kükü-lük は，従来 kökü-lüg「国産，自家製」あるいは「衣服の付属品；帯用の」と解釈されているが，十分な論拠を伴うものではない．G. Clauson, A Late Uyğur Family Archive. In: C. E. Bosworth (ed.), *Iran and Islam*, Edinburgh, 1971, 179; 梅村坦「ウイグル文書「SJ Kr. 4/638」」『立正大学教養部紀要』20, 1987, 59; Л. Ю. Тугушева, *Уйгурские деловые документы X–XIV вв. из Восточного Туркестана*, Москва, 2013, 181.

(21) M. Yaldiz et al. (eds.), *Magische Götterwelten: Werke aus dem Museum für Indische Kunst*, Berlin, 2000, 225, No. 326, MIK III 4453; C. Dreyer/L. Sander/F. Weis (eds.), *Museum für Indische Kunst: Dokumentation der Verluste,* Vol. III, Berlin, 2002, 111, IB 4518.

【14】「ジャライル朝」の金宝令旨［上巻 54–56］

この 773/1372 年発行ペルシア語命令文書は本書第 16 章で検討される．原載論文［宮紀子 2014］では，この文書の発令者をジャライル朝君主スルタン=アフマド（Sulṭān Aḥmad, r. 1382–1410）に比定していたが，本書ではこれを改稿し，アフマドの父で先々代君主のシャイフ=ウワイス（Šayḫ Uways, r. 1356–1374）を発令者とする可能性にも言及する［下巻 868］．本処で「ジャライル朝」とのみ称して発令者を特定しないのは，おそらくこの改稿に対応しよう(22)．

しかし，この文書の紀年時点で在位していたシャイフ=ウワイスを発令者とみなすべきことは，つとに Herrmann が種々の論拠から明瞭に指摘している［Herrmann/Doerfer 1975, 47–49］．著者が原載論文および本書第 16 章でこの Herrmann/Doerfer 論文を頻繁に参照しながら，本文書の発令者の比定に関する考証に言及しないのは不可解である．

なお，著者が本処で引用する『集史』ガザン紀第 3 部第 22 話については，フレグ=ウルスおよびジャライル朝の文書行政官房におけるモンゴル語・ペルシア語合璧命令文書の発給システムに関わって，評者らも著者とは独立して現代日本語訳と分析を提示している［Šayḫ al-Ḥukamā’ī・渡部・松井 2017, 118–125］．彼此比較されたい．

【15】造格接尾辞と「裏」［上巻 92］

モンゴル時代の漢文官文書の冒頭定型文言「皇帝聖旨裏」が M. qaγan-u ǰarliγ-iyar の直訳であることは，多くの同時代資料から確証される［e.g., 松川 1995, 38–40; 松井 2015, 55–57］．著者は，この漢訳をおおむね「皇帝(カアシ)の聖旨(ジャルリク)の裏(うち)に」と読み下し，造格 +iyar に対応する「裏」を「〜の裏(うち)に」と訳す［上巻 92, 228–229, 261, 264, 266, 283, 356, 364, 447］．一方で，本書の諸処で，著者はモンゴル語の与位格にも同様に「〜の裏(うち)に」の訳を与えている［e.g., 下巻 797, 905, 941］．著者が強調する，「根底のモンゴル語を常に意識す」る観点［上巻 501］からすれば，冒頭定型文言としての「皇帝聖旨裏」の「裏」は，造格の語感に即して「〜により」と訳し分けてもよいのではないか(23)．

ちなみにチベット語命令文も，モンゴル語命令文の冒頭定型文言における造格と与位格の区別を反映する：M. qaγan-u ǰarliγ-iyar > Tib. rygal po’i lung gis「皇帝のおおせ（聖旨）により」；M. tngri-yin küčün-dür qaγan-u suu-dur > Tib. gnam gyi she mong la rgya po’i bsod nams la「天の力に，皇帝の福廕に」［小野 1993, 208–207; 中村 2005, 33］．

---

(22) 原載論文［宮紀子 2014, 21–22, 33–34］では，著者は本文書の末尾にアフマドの尊称 Mu‘īn al-Dīn を読み取り，これを発令者比定の論拠としていたが，この判読案は本書では放棄されている［下巻 891–892; cf. Šayḫ al-Ḥukamā’ī・渡部・松井 2017, 65］．ただし著者は，この尊称に関する語註の一部の叙述をあえて解題に移して再録しており［下巻 868–869］，なおアフマドを発令者とする可能性をより高く見積もっているのかもしれない．

(23) 例えば，ちなみに，著者［下巻 950］が「枢密院の官人(ノヤン)毎(たち)根底(に)，囊家歹(ナンギャダイ)が蒙古(モンゴル)文字の裏(うち)に呈するので有る」と読み下す『元典章』の直訳体漢文にも，čümui ön-ü noyad-ta nangγiyadai mongγol bičig-iyer ügülemü「枢密院のノヤンたちに，ナンギャダイがモンゴル語文書により述べる」のようなモンゴル語原文を再構できよう．カラホト出土モンゴル語行政文書には，Isina sunggon vu-yin noyad-ta .... bičig-iyer ügülemü / ǰiγarun「イシナ総管府のノヤンたちに，（某人が）文書により述べる／示すに」という並行表現が在証される［MDQ, Nos. 034, 038; cf. 松井 2018, 9–10］．

【16】元代銅権の四体合璧銘文［上巻 171］

本処では，元貞元年（1295）大都路製造の銅権にみえる，漢文・パクパ文字漢語・ウイグル文字モンゴル語・アラビア文字ペルシア語四体合璧銘文の解読案が提示される［cf. 上巻 28; 下巻 834, 848］．同種の四体合璧銘文については，つとに黄時鑑 1997 が複数の例を収集して検討しており，著者が言及する例はおそらく黄時鑑の No. 1 にあたる．ただし，黄時鑑はウイグル文字モンゴル語銘文の一部を誤読しており，漢文の「斤秤」に対応するモンゴル語を badman deng「斤の秤」と判読すべきことは評者が初めて指摘した［松井 2002, 111; cf. 松井 2004, 158．M. deng「秤，錘」は Chin. 戥〜等（パクパ字音 dhiŋ）の借用語］．著者のモンゴル語転写は評者とほぼ一致する(24)．

一方，2 行にわたるペルシア語銘文は加点を十分に確認できず，解読は困難である．黄時鑑は ğin sī panğī sangīnī「重三十五斤」としたが，ğīn جين を見母の斤（パクパ字音 gin）の音写とみなす点には従えない［cf. 本稿脚註 4］．一方，著者の čudan-i sī panğ mann az sanghā'ī「諸権錘のうち三十五斤の鋳鉄」についても，čudan چدن「鋳鉄」が銅権の呼称とされるのは不自然である．また，著者は本書の諸処でペルシア語の重量単位 mann と漢語の「斤」の対応を主張するが［e.g., 下巻 690, 696, 843, 846, 857, 966, 989］，モンゴル時代における Chin. 斤＝ P. mann の実態的対応を著者の提示する史料から導くことはできない(25)．

---

(24) 評者とは独立して董永强 2007 も M. badman ~ batman を判読したものの，deng「秤，錘」の読解には至らなかった．なお，モンゴル時代の M. badman ~ T. batman = Chin. 斤の実態的な対応は，この四体合璧銘文銅権のほか，漢文史料にみえる駅伝制度の規定とチャガタイ=ウルス発行モンゴル語駅伝利用特許状の内容の比較からも確認される［松井 2004, 164–163］．

(25) 著者は Chin. 斤 = P. mann の対応の根拠として，『新刊睎范句解八十一難經』の「心重十（一）［二］両【心計算十二両重】，‥‥小腸重二斤十四両，‥‥左廻畳積十六曲」が，ペルシア語『珍貴の書（*Tanksūq nāma*）』で「素の心臓をはかりにかけるなら 120 miṣqāl，‥‥小腸は‥‥目方で 2 mann 半である．毎 mann は 200 miṣqāl, 16 回波形に曲がる」と対訳されることを指摘する［下巻 843, 856–857］．しかし，元制の 1 斤は 16 両であるから［郭正忠 1993, 143; cf. 本書下巻 847–848,『事林広記』（対馬歴史民俗資料館蔵元刊本）別集巻 10・算法類「十六兩爲一斤」］，上記の小腸の重量「二斤十四両」は 2.875 斤となるが，『珍貴の書』では小腸の重量を 2.5 mann としており，斤と mann の数値は厳密には一致しない．元制の 1 斤＝16 両＝160 銭は理論的には ca. 640 g と推計され（1 銭＝ca. 4 g と暫定．なお著者は 1 銭＝4.2 g と主張しており［上巻 14］，これをかりに採用すれば 672 g），官製銅権の現物に基づく推計値も ca. 600–640 g の範疇におおむね収斂する［丘光明 1992, 466, 470–471; 郭正忠 1993, 193; 蔡明 2013, 67–68］．これに対し，P. mann の実態値は時代・地域により相当に異なるものの，フレグ=ウルスの本拠タブリーズ周辺では 14 世紀には 5/6 kg = ca. 833 g であったと推計されており［Hinz 1957, 18, 42, 47］，斤の推計値とは大きく異なる．さらに，上記『珍貴の書』引用箇所は漢文の「十二両」（＝120 銭）を 120 miṣqāl とペルシア語訳しており，つとに拙稿［松井 2004, 159–158］で指摘した P. miṣqāl = Chin. 銭 (= Uig. baqïr = M. baqir) という重量単位の対応を傍証する．従って，Chin. 斤＝160 銭は 160 miṣqāl と等しくなるが，上掲『珍貴の書』は「毎 mann は 200 miṣqāl」というから，やはり斤と mann の重量は一致しないこととなる．また，1 mann = 200 miṣqāl の重量も ca. 800 g 前後と推計され，Hinz の所説と近似する．すなわち，『珍貴の書』対訳記事は，著者の所説に反して，むしろ重量単位としての斤と mann とが実態的に対応しないことを示す．

如上の斤・mann および miṣqāl の推計値に基づけば，「二斤十四両」は ca. 1,725–1,840 g（著者の 1 銭＝4.2 g 説を採れば 1,932 g），ペルシア語の「2 mann 半」は ca. 2,000–2,082 g（同じく 2,100 g）と算出できる．これらを近似値とみなせるならば，対訳における「二斤十四両」と「2 mann 半」の相違は，臓器の実際の重量をふまえた換算に由来するとも考えられよう．しかし，『珍貴の書』の別処では漢文原典の「二斤一両」をも「2 mann 半」と対訳する［本書下巻 856］．この例は，やはり Chin. 斤が P. mann と対応しないことを示すとともに，『珍貴の書』の漢訳の正確性について再検討する必要を示唆する．

評者は，その他の四体合璧銘文銅権の例［黄時鑑 1997, Nos. 2, 6, 7; cf. 丘光明 1992, 467］とも勘案して，ペルシア文第 1 行の冒頭語を ǦNK جنک = ǧing (~ čing) と判読し，漢語の「秤」（パクパ字音 čʻiŋ）の借用語とみなす(26)．また著者が mann من とした第 1 行の末語は，batman بتمن つまり M. badman ~ T. batman「斤」の借用形式（あるいはその誤刻）の可能性を提案したい．このように考えて誤りなければ，これらの四体合璧銘文のペルシア文は，おおむね第 1 行に ǧing-i .... batman「～斤の秤」という構文をもち，漢文・モンゴル文とも対応することになる．

第 2 行については，黄時鑑の sangīnī「重量」，著者の az sanghāʼī「諸権錘のうち」とも鉄案ではないように思われるが，評者にも成案は無い．現物調査をふまえた再検討が俟たれる．

【17】咬難［上巻 198］

著者は人名「咬難」に「ヨカナン」というカタカナ表記を与える［cf. 下巻索引 1090］．しかしこの景教徒人名 M. yoqanan ~ T. yoxanan (< Syr. ywḥnn = yōḥannān) の漢字音写は，語中の -q(a)- ~ -x(a)- を多く忽～合などで示す（要忽難～月忽難～岳合難，etc.）．本処の「咬難」の原語としては，別の景教徒人名 Syr. ywnn = yawnan (> T. yonan) を想定すべきである［cf. Zieme 2015, 187］．

【18】「横枝児」［上巻 204］

『龍虎山志』所収のモンゴル語直訳体漢文聖旨「加上卿」の一節について，著者は「它的正派の徒弟が接続して掌管せ者．横枝児不揀那箇先生であっても休入去者」と訳す．しかし，後続する 2 通の直訳体漢文聖旨は，同様の文脈で「いかなる横枝児の先生毎も介入するな」という(27)．文脈に鑑みれば，これらの「横枝児」は「横やりを入れる」ではなく，「正派」に対する「支派，分派，傍流」，または「他の，外部の，無関係の」と解すべきではないか(28)．

---

ただし，『回回館訳語』来文が P. mann を Chin. 斤に，また *Rasūlid Hexaglot* が P. mann を T.-M. batman「斤」に対訳させるのは，著者の指摘する通りである［下巻 857; cf. 本田 1991, 524–532; RH, 244］．とはいえ，これらの対訳例は「代表的な」重量単位をあくまで文辞のうえで対応させた可能性もあり，モンゴル時代における実態値の一致の挙証とするには慎重となるべきであろう．

(26) 898/1492 年までに成立していた *Muqaddimat al-adab* のモンゴル語彙集にも，アラビア文字表記の ǦNK = ǧing < M. ǰing「秤，錘」が在証される［MS., Tashkent, Alisher Navoi State Museum of Literature, No. 202, fol. 124a; Saitô 2008, Text 74–75; cf. Поппе 1938–1939, 206］．この M. ǰing は，元代銅権のペルシア語銘文にみえる ǧing (~ čing) と同じく，Chin. 秤の借用語とみなすべきであろう．ちなみに，『五体清文鑑』では M. ǰing は Chin. 斤に対訳され［民族出版社, 1957, 3028］，現代モンゴル語 ǰing にも「秤，錘；重量，目方」の他に，約 0.6 kg もしくは「斤」に相当する重量単位としての用法が知られる［Kowalewski III, 2329; Lessing, 1057; MKT, 1328］．ただし，*Muqaddimat al-adab* の在証例はおそらく 14 世紀に遡ってモンゴル語に ǰing「秤，錘」が存在していたことを示唆する一方，同時期に斤の見母が舌面音化していたとは考えられないので［cf. 本稿脚註 4］，モンゴル時代における Chin. 斤 > M. ǰing という借用を想定することはできない．

(27) 『龍虎山志』巻中，加特進「張上卿之後，只它的正派徒弟毎根底接續掌管者．它的道子裏，不揀甚麼横枝兒先生毎，休入去者」；同，庇衞道教「張宗師之後，只交它的正派徒弟毎承繼接續掌管者．它的其間裏，不揀那箇横枝兒先生毎，休入去者」［『道教文献』1, 丹青図書有限公司, 1983, 188, 192］．なお，後者の「它的其間裏‥‥休入去者」は，モンゴル語 ǰaγur-a buu orutuγai「間に入るな（＝干渉・介入するな）」の直訳［cf. 照那斯圖 1991, 102; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 316; Šayḫ al-Ḥukamāʼī・渡部・松井 2017, 71–72］．

(28) 『漢語大詞典』第 4 巻, 1244; 龍潜庵『宋元語言詞典』上海辞書出版社, 1985, 984; 大東文化大学（編）『中国語大辞典』上，角川書店, 1994, 1265.

これらの「横枝児」に対応するモンゴル語としては，「横，脇，隣」の原義から「他，その他；外部，局外」をも意味する köndelen を想定できる［Lessing, 488; MKT, 695; Kowalewski III, 2566］．『元典章』にみえる直訳体の表現「駅伝馬・祗応・夫役や横枝児の差発は負担するな【鋪馬・祗應・夫役・横枝兒差發休與者】」［巻 32，礼部 5・学校 2・医学・医戸免差発事］が，至正二十八年（1368）順帝トゴンテムル聖旨の $_{40–42}$ula·a ši·usu bu barit‘uqayi k‘öndelen alban qubč‘iri bu abt‘uqayi「駅伝馬・食料を奪うな．横枝児（M. köndelen）の差発（M. alban qubčiri）をとるな」［照那斯圖 1991, 106–112; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 331–350］というモンゴル文とほぼ並行することも参照できる．

【19】按答奚〜按打奚［上巻 263］

モンゴル時代の漢文史料には，一種の刑罰をさす按答奚（〜按打奚〜案打奚〜俺打奚〜俺答奚）という術語が頻見する．その刑罰内容や語源については諸説あったが［cf. 劉曉 2008］，つとに村上正二は 17 世紀のモンゴル語法典に財産刑としてみえる aldanggi ~ aldangki との関係を推定していた［de Rachewiltz 1999, 72］．さらに松川節は，太宗オゴデイ十二年庚子（1240）十方大紫微宮懿旨碑の末尾のウイグル文字モンゴル語添書を $_{1}$ene minü üge busi bolγaγ-san kümün $_{2}$yeke? (....) aldang-qitu boltuγai「この私のことばに違反する者は，大いなる(?)‥‥処罰されるべきもの（aldang-qitu < aldangqi-tu）となれ」と判読し，この aldang-qi ~ aldangqi (~ aldangki ~ aldanggi) をモンゴル時代の按答奚の原語の在証例とした［Matsukawa 2007］．語中の -dang- が答・打と音韻的には正確に対応しないものの，村上・松川の見解は妥当に思われる(29)．

著者は本処（第 7 章）の原載論文での按答奚〜按打奚の語解に際して，上記の松川説（ただし未定稿）を肯定的に引用したものの［宮紀子 2004, 205–204］，本書ではその引用を削除している．これは，著者自身が見解を改め，モンゴル帝国時代の牌子のパクパ文字モンゴル語銘文の aldaqu ük‘ugu (= M. aldaqu ükükü) という文言に着目し，この aldaqu を按答奚〜按打奚の原語とみなしたこと［宮紀子 2011, 704＝本書上巻 475］を反映するものであろう．この可能性は諸先学も指摘していたが［e.g., 方齡貴 2004, 166–167; 照那斯圖 2007, 68; 蔡美彪 2011, 290–291］，著者は新たに，不蘭奚〜孛蘭奚と漢字音写される M. buralqi ~ buralki「闌遺；帰属不明で遺失物扱いとなった人・家畜」がペルシア語では būlārġū ~ bulārġū と表記されることから，漢語の奚（パクパ字音 ħėi）が「qu/gu の音価を表す」と推定し，aldaqu > 按答奚の傍証とする［上巻 263, 442, 475］．

しかし，牌子銘文の aldaqu は v. alda-「罰する；罪を犯す，失悞する，誤る」の現在未来形動詞であり，ken ülü büširekü aldaqu ükükü「誰であろうが従わぬ者は処罰され死ぬ（aldaqu ükükü）」という文脈で述語終止形として用いられる(30)．この述語終止形としての aldaqu の用例を，常に名詞

(29) de Rachewiltz は松川の aldang-qi ~ aldangqi という判読案に反論して aldaγ-si ~ aldasi > 按答奚という旧案を支持する［de Rachewiltz 2013, 113–114］．その反論のうち，語中の -dang- の漢字音写の不整合と接尾辞の機能面についての指摘は考慮すべきであるが，暁母の奚がモンゴル時代に /si/ と発音されたという推定は十分な根拠を欠く．一方，齊木德道爾吉 2008, 65–66 は松川案を支持する．本文後文も参照．

(30) Ligeti 1972b, 109–112; 照那斯圖 1991, 182–185; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, §§42, 43 (1–3); Tumurtogoo 2010, 125–128; cf. Ligeti 1972a, 284–287; Tumurtogoo 2006, 280–284; 劉曉 2008, 233; 齊木德道爾吉 2008, 65–67; 青格力 2011, 414. フレグ=ウルス発行モンゴル語命令文書にも，bidan-a eyin kemegülüged bürün ǰarliγ busi

として言及される按答奚〜按打奚に結びつけるのは牽強であろう．また，漢語の奚が /qu/ の音価を表したとは考えづらく，P. būlārġū と Chin. 不闌奚〜孛闌奚の対応をその論拠とすることも，原語の M. buralqi ~ buralki に鑑みれば無理がある(31)．

さらに著者は，前述の十方大紫微宮懿旨碑のモンゴル語添書についても，諸先学を参照することなく，$_1$ken-e minu üge buši bolqaqsan kümün $_2$qa'-a ere'e aldaq eriye boltuqai「誰であれ俺的言語に別く的者は，何処であれ罪過に按打奚を尋めて教做者」という独自の校訂・訳文を提示して按打奚〜按答奚 <aldaqu の傍証とする［上巻 475］．しかし，著者が aldaq とする語の末字は -Q とはみなしがたい（$_1$bolγaγ (-san) の -Q とは若干筆致が異なる）［Matsukawa 2007, 299］．また，モンゴル語術語としての aldaq の語形成や，これを異形式の aldaqu と同様に「按打奚」と訳す根拠については説明が無く(32)，テキスト解釈に必要な手続きを欠いている．かりに著者に従って aldaq と

---

bolγaqun aran aldatuγai ükütügei「我らにこのように言わせているにもかかわらず，勅書に違反する人々は，処罰され死すべし」という威嚇文言がみえ，v. alda- ükü- が定型表現とされていたことが知られる［Cleaves 1953, 26, 32, 49; Ligeti 1972a, 257, 262; Tumurtogoo 2006, 181, 187］．一般に，形動詞 -qu/-kü が終止形となる場合には繋辞や助辞を伴うことが要求され，照那斯圖 2007, 67 も牌子銘文の aldaqu ükükü の後に boltuγai「〜となれ」を補足して解釈することを主張する．しかし，例えばトゥルファン出土のモンゴル語暦占文書には $_6$kebiḏ delgebesü $_7$[.... yab]uγulbasu degel eḏkebesü ǰoqiqu「店を開けば，‥‥を送れば，服を裁断すれば，適する」［BT XVI, Nr. 54］，またカラホト出土の暦占文書 SI G105 (17v) にも ker ber üileḏbesü kelen aman-ṯur üčiraqu「もしも（何かを）なせば，もめ事に遭う」など，形動詞 -qu/-kü が助辞や繋辞を伴わずに述語終止形となる用例が確認される．モンゴル語牌子銘文には，威嚇文言として ken ese büširegesü aldatuγai「誰であろうが従わなければ処罰するように」という書式をもつ例もあり，述語動詞として aldatuγai (imp. < v. alda-) が aldaqu ükükü と相互置換されることも参照できる［呼格吉勒圖・薩如拉 2004, §§44 (1–4); Tumurtogoo 2006, 280–281; Tumurtogoo 2010, Nos. 60–66; 劉曉 2008, 233］．ちなみに，マルコ=ポーロ『世界の記』は，モンゴルの牌子銘文の文言を「(服さぬ者は）誰であれ死なしめられ，その財産は没収されん」あるいは「(彼に服さぬ者皆）斃され（死して）滅ぼされん」と訳す．これらの原文としては，命令形の aldatuγai だけでなく，述語終止形としての aldaqu ükükü も想定できる［高田 2013, 32, 183, 186; cf. Moule/Pelliot 1938, I, 81, 92; 愛宕 1970, 191–193; BT XVI, 177–178; 小野 1993, 197–196］．

(31) 不蘭奚〜孛蘭奚に対訳されるモンゴル語としては，buralqi (> pl. buralqin) および buralki という両様のウイグル文字形式が在証される［杉山 2004, 434; Cleaves 1950, 56, 75, pl. XXXI; MDQ, Nos. 29, 34; cf. Kara 2003, 7］．これらの buralki = BWR'LKY の筆致はいずれも明瞭であり，著者［上巻 443］が BWR'LQY と改変するのは失当である．この両形式における -QY/-KY の交替［cf. Ligeti 1963, 147–151］は，母音に /i/ をもつことを確証するので，不蘭奚〜孛蘭奚の末字の「奚」を /qu/ ~ /gu/ の反映とみなすことはできない［cf. Matsukawa 2007, 299］．また，著者は語根として buralq (~ bularq) を採用し，buralqi は「とくに人を表わす場合」の形式とするが［上巻 440–443］，その文法的な根拠は不明である．モンゴル文語には -lq という語末の閉音節は存在せず，また管見のモンゴル語文法書類には，名詞・形容詞の語末に +i を加えてその属性が人であることを示すという文法規則は確認できない．本書第 9 章で紹介される『書記典範（*Dastūr al-kātib*）』所収のブラルグチ（P. būlārġūčī ~ M. *buralqiči）叙任状も「būlārġū とは，モンゴルの慣用語で，僕・婢・四脚等の，持ち主が明らかでない遺失物をいう」といい［上巻 437; cf. 本田 1991, 74］，人（「僕・婢」）と動物（「四脚」）とを語形の上で区別していない．なお，M. buralqi ~ buralki の語形成については，照那斯圖 2010 も参照されるべきであった．一方，ペルシア語史料にみえる būlārġū ~ bulārġū は，M. buralqi (~ buralγi) が būrālġī と借用され，さらに音位転換（-ral- > -lar-）・異化（-ī > -ū）して生じた形式と推測できる［cf. Pelliot 1959, 113–114; TMEN I, Nr. 93］．著者はイタリア語の bolargo について，「対象が馬疋だからこそ」の形式というが［上巻 443］，これも単に P. būlārġū を借用したものとみなすべきであろう．

(32) 著者は別処［下巻 931］でも「按答奚」に aldaq というローマ字表記を与えるが，索引ではこれを「aldaqu 按打奚」の項目に掲げており［下巻 1113］，一貫しない．

aldaqu を同一語とみて按答奚〜按打奚の原語と解するとしても，この語に先行する qa’-a ere’e「何処であれ罪過に」や後続の eriye「尋(もと)めて」はウイグル文字の筆致に適さず，訳語も奇矯である(33)．すなわち，このモンゴル語添書に aldaq = aldaqu > 按打奚〜按答奚を見出す著者の新案では，添書全体の文脈を整合的に把握できず，その校訂に依拠することはできない．

松川説をふまえつつ先行研究を整理して添書の第 2 行を解釈するならば，yeke eregü aldangqitu boltuγai「大いなる罪過（eregü aldangqi）があるものとなれ」もしくは yeke ạrke aldangqitu boltuγai「大いなる力（により）／強力に(?)処罰されるものとなれ」のいずれかとなろう(34)．ただし，松川は上掲の通り最終案を示しておらず，別解の可能性もあるかもしれない．

【20】『元典章』巻 33・礼部 6・釈教・寺院裏休安下［上巻 270］

標記の直訳体聖旨に対する著者の訳文のうち，「体例に没(な)いことは，休倚気力者(ちからにたまるな)」【没體例休倚氣力者】と「休断拽奪要者(ひきちぎってもとめるな)」には，モンゴル語原文を想定すると若干の違和感を覚える．

前者は，蒙漢合璧命令文に頻見する yosu ügegüi üiles buu üiledtügei：没體例的勾當休做者「体例にないことはするな」をふまえた訳文であろうが，ここではやや構文を異にする yosu ügegü/ügei küčü buu kürgetügei「道理なく力をふるうな」［e.g., 照那斯圖 1991, 139; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 406; MDQ, 73; cf. BT XVI, Nr. 70; 松川 2002, 57–58］を想定すべきであろう．

後者は，明らかに buliǰu tataǰu buu abtuγai「奪い引っ張って取るな」の直訳である［e.g., Doerfer 1975, 193; 杉山 2004, 388–393; 中村・松川 1993, 41–48; cf. MDQ, 74］．

【21】岳実朮郎中［上巻 281］

この人名「岳実朮」は，おそらく「岳実木」の誤記であり，「日曜」を意味する中世イラン語に由来する景教徒人名 yušimut (> P. yūšimūt)［Zieme 2015, 188–191］の音写とみなすべきであろう．

---

(33) 本書におけるモンゴル語のローマ字表記は標準的な文語転写方式に準拠せず，特に第 2 行冒頭の qa’-a ere’e は一般的なモンゴル文語辞典にみえない形なので，著者による個々のウイグル文字の判読とモンゴル語の解釈は，十分には把握できない．しかし，冒頭の qa’a「何処であれ」(『元朝秘史』・『華夷訳語』の qa’a > 中合阿：那裏〜那「どこ」に基づく解釈か）の語頭字は明らかに Y- と判読できるので，著者の表記には従えない．続く ere’e「罪過に」は，ere’e「罪過」に文脈から「〜に」を補って和訳したか，または ere’/ ere「罪過」に与位格 +e が接尾するという解釈と思われる．これと関連して，著者は『元朝秘史』の ere’ü-tür bü orotuqai「刑罰に入れない（＝処罰しない）ように」という文言を引用する．しかし，「罪過」を意味する *ere’e / *ere’ / *ere というモンゴル語は確認されない．また，『元朝秘史』にみえる ere’ü「罪，刑罰」は，文語形式では eregü ~ eregüü (= ’R’KW(W)), 現代口語形式は эрүү /erüü/ であり［Kowalewski I, 251; Lessing, 321; MKT, 147］，語の後半部は /e’ü/ > /üü/ というモンゴル語に一般的な音韻変化をたどったとみられるので，著者の示唆する *ere’e / *ere’ / *ere という形式とは関連させられない．一方，著者の aldaq に後続する eriye「尋(もと)めて」は，v. eri-「尋ねる，捜す，求める」を語幹とした訳語と推測される．しかし，動詞語幹に接尾できる -ye は voluntative の終動詞しかあり得ないので，これを「（尋め）て」と訳すことはできない．原文の字形も eriye = ’RYY’ (~ ’RYY-’) とは判読できない．

(34) 按答奚（aldangqi）の直前語を eregü「罪，罪過」とみた Ligeti 説［Ligeti 1972a, 19］を，de Rachewiltz は筆致に即して斥け，erke「力」に修正する［de Rachewiltz 1981, 54–56; de Rachewiltz 1999, 71–72; cf. Tumurtogoo 2006, 10］．この修正は説得的ではあるが，原文の筆致を，eregü = ’R’KW の語末の -W の円弧が閉じられた後，下方にやや長く運筆されたものとみなすことも完全には排除できない．

【22】脱脱禾孫［上巻 283］

駅伝利用の監察官として漢文史料にみえる「脱脱禾孫（～脱脱火孫～脱脱和孫）」が，モンゴル語・テュルク語・ペルシア語の諸史料にみえるトトカウル（M. todqaγul > T. todqaγul ~ P. tūtqā'ūl ~ tutqā'ūl）に相当することは定説となっている．この M. todqaγul は，未在証の v. *todqa-（cf. RKW, 404, v. totχɒ-「防ぐ，差し止める」）から名詞形成接尾辞の -γul により形成されたと考えられる．一方，脱脱禾孫という漢語表記は，v. *todqa- と名詞形成接尾辞の -sun からなる *todqasun のような形式を推定させるが，これはモンゴル語文献には在証されず，ペルシア語への借用例も確認されていない．このように，同一のモンゴル語動詞に由来するものの，モンゴル語・ペルシア語史料には -γul/-gül による形式のみが在証され，-sun/-sün による形式は漢文史料中の音写表記からのみ推定されるという職掌名詞は，todqaγul／脱脱禾孫の他にも複数知られている：e.g., M. bökegül > 孛可温（~ P. būkā'ūl)／*bökesün > 孛可孫～卜可孫； ǰasaγul > 札撒温（~ P. yasā'ūl)／*ǰasasun > 札撒孫； qoriγul > 火里温／*qorisun > 火里孫［Mostaert/Cleaves 1952, 436–437; TMEN I, Nr. 124; TMEN II, Nr. 755; Cleaves 1964; Cleaves 1967; TMEN IV, 1863; 党寶海 2006, 104–110; 党寶海 2008, 3–5; Vásáry 2009］.

著者は本処［上巻 283］で，この「脱脱禾孫」に「トトカウルスン」というカタカナ表記を与える．著者は他処でも，原載論文の「トトカウル」・「トトカスン」あるいは tutqā'ūl を「トトカウルスン」や todqa'ulsun と修正しており［上巻 459, 481–482; cf. 宮紀子 2004, 184; 宮紀子 2011, 698］，脱脱禾孫 <todqa'ulsun という再構案を積極的に採用したと見受けられる(35)．しかし，この修正の論拠は本書では明記されない．

脱脱禾孫の原語を todqa'ulsun (= M. todqaγulsun) とする見解は，著者に先んじて宮海峰が提示している．これは，-'ulsun/-'ülsün (= M. -γulsun/-gülsün) という接尾辞により形成された deverbal noun が『元朝秘史』に散見することを援用するものである： qara'ulsun > 中合舌刺兀勒孫：哨望「哨兵，偵察」； nengǰi'ülsün > 能知温孫：搜的每「搜索者たち」； eri'ülsün > 額舌里兀勒孫：尋的「求める者」．さらに宮海峰は『元史』からも ǰasa'ul ~ ǰasaγul > 札撒温／札撒孫の異形とおぼしき「扎撒温孫／札撒兀孫／扎撒火孫」を見出して *ǰasa' ulsun ~ *ǰasaγulsun の漢字音写とみなし，-'ulsun/-'ülsün による語形成の傍証とする［宮海峰 2010, 140–141］.

ちなみに，『元朝秘史』には adu'ula'ulsun > 阿都兀剌兀勒孫：教放牧的「牧民」，čaqdu'ulsun > 察黒都兀勒孫：後哨「殿軍」も確認される［§170, 06:01:10, 06:01:07］．また後至元四年（1338）の漢蒙合璧ジグンテイ碑文（『達魯花赤竹君之碑』）に M. manaγulsun「見張り，看守（< v. mana-)」［Cleaves 1951, 76; 渡部ほか 2010, 131–132］，至正五年（1345）居庸関東壁パクパ文字碑文にも uduri·ulsun (~ M. uduriγulsun)「指導者，教師（＝仏陀）；指導」［CYK, 255–256; 照那斯圖 1991, 158; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 426; cf. Kowalewski I, 387］が在証される．これらの例を参照すれば，13～14 世紀のモンゴル語において，接尾辞 -'ulsun/-'ülsün (= -γulsun/-gülsün) による語形成を想定すること自

(35) ただし，本書には todqa'ul / todqasun の併記や，「脱脱禾孫（todqa'ul 通行税徴収官)」，「tūtqāūl（< Mon. todqa'ul 脱脱禾孫)」という叙述も残り［下巻 491, 640, 809］，やや一貫性を缺く．

体に問題は無い(36).

とはいえ，宮海峰や著者が推定する *todqa'ulsun という形式そのものは，同時代のモンゴル語文献になお在証されず，語中の /'ul/ を反映する「脱脱禾温孫」のような漢字表記も確認されていない．脱脱禾孫〜脱脱火孫〜脱脱和孫という漢字表記に即する限り，その語中に /'ul/ の音価を想定するのは困難である(37).

また，接尾辞 -'ulsun/-'ülsün (= -γulsun/-gülsün) は，職掌名詞を形成する -'ul/-'ül (= M. -γul/-gül) に，一般化ないし集合性を表わす接尾辞 +sun/+sün が後続したものと考えられている(38)．著者も qara'ulsun を qara'ul の複数形と明記し［上巻 482］，また P. tutġā'ūlān (pl. < tutġā'ūl < M. todqaγul) に「todqa'ulsun 脱脱禾孫」を対応させるから［上巻 459］，todqa'ulsun を todqa'ul の集合的形式・複数形と解釈しているのかもしれない(39)．しかし，漢文史料にみえる脱脱禾孫には，明らかに単一個人をさして用いられる事例も少なくない(40)．「脱脱禾孫」が集合的形式・複数形としての *todqa'ulsun ~ *todqaγulsun を音写したものとは考えづらいのではないか．

これに対して，todqaγul / *todqasun (< v. *todqa-) のように，共通の動詞語幹から -γul/-gül および -sun/-sün によってそれぞれ形成された職掌名詞が併存したという推定については，孤証ながら『集史』クビライ紀の gatūsūn「密偵，間諜，秘密警察」［ĞT/Boyle, 297; cf. 松田 1983, 41］を実例

---

(36) 小澤重男は，この接尾辞 -'ulsun/-'ülsün (~ M. -γulsun/-gülsün) は『元朝秘史』に特徴的なもので，古典期以降のモンゴル文語にはみられないとするが［小澤 1985, 144–145, 286; 小澤 1986, 149–150; 小澤 1987, 23］，本文に示した uduriγulsun (~ uduri·ulsun) の他，モンゴル文語辞典には sakiγulsun (< v. saki-)「守護神，護法神，神仙，神像；護符」も確認される［Kowalewski III, 1326; MKT, 862］.

(37) この点は，bökegül > 孛可温／孛可孫〜卜可孫，qoriγul > 火里温／火里孫についても同様である．著者は火里孫に qori'ulsun を再構し，また孛可孫にも「ブケウルスン」というカタカナ表記を与えるが［上巻 471; 下巻 912; cf. 宮紀子 2011, 709; 宮紀子 2014, 50］，*qori'ulsun ~ *qoriγulsun や *böke'ülsün ~ *bökegülsün というモンゴル語形式や，火里温孫，孛可温孫のような漢字表記は確認されていない．ちなみに，著者は böke'ül ~ bökegül をテュルク語からモンゴル語に借用されたとするが［上巻 469］，一般には，テュルク語における名詞形成接尾辞の -γul/-gül は 13 世紀以降にモンゴル語から導入されたと考えられている［e.g., Clauson 2002, 95; Eckmann, 67 (-vul = -avul); Vásáry 2009, 197］．ちなみに，Vásáry 2009 は，bökegül を v. böküi- ~ bökei- "to bend down, bow one's head, salute by bowing" からの派生語とする．

(38) Cf. 小澤 1985, 144–145, 286. ただし，小澤 1987, 23 では +sun/+sün が集合的な意味を与えるという点についてなお検証が必要であるとしたが，小澤 1997, 258–259 では「一般化ないし集合性を表わす」と明言する．一方，宮海峰は接尾辞 -γulsun を，使役の助動詞 -γul- に名詞形成接尾辞の -sun が後続したものとみなすが［宮海峰 2010, 143］，小澤はつとにこのような解釈を否定している［小澤 1985, 145; cf. 渡部ほか 2010, 131–132］.

(39) 索引［下巻 1117］でも「todqa'ul 脱脱禾孫」のみが項目に掲げられ，トトカウルスン・todqa'ulsun は示されない．

(40) E.g.,『元史』巻 87, 百官志 3「積石州元帥府，達魯花赤一員，元帥一員，同知一員，知事一員，脱脱禾孫一員．‥‥貴德州，達魯花赤・知州各一員，同知・州判各一員，脱脱禾孫一員」;『雪楼集』巻 16, 南剣路総管府判官中都君墓誌銘「(中都) 授武略將軍・提擧楊羅渡・龍興路脱脱禾孫，提調十三路站赤」;『経世大典』站赤門，至元九年（1272）八月「是月，西京路脱脱禾孫昔班（Šiban）盤詰詐使忽賽因（Ḥusayn）及無箚子起馬之人箚璘」［『永楽大典』巻 19417, 6a］;『元朝典章』站戸不便「臨洮府脱脱禾孫塔察兒（Taγačar）備」［『永楽大典』巻 19424, 3a–4b; cf. 同巻 19417, 10a–11a, 13a］;『至正條格』巻 2, 断例・職制・発視機密文字「涿州脱脱禾孫阿里（'Alī), 擅將雲南省宣使梁貴見賚雲南聲息機密實封文字拆開, 與脱脱禾孫亦失撒里（*İš-Šäli?）一同從頭讀念」;『高麗史』巻 105, 趙仁規伝「元爲（趙仁規）宣武將軍・王京斷事官・脱脱禾孫，賜金牌」．これらの用例については党寶海 2008 も参照．

として指摘できる．この P. gatūsūn は，M. v. gete-「探査する，偵察する」［Kowalewski III, 2463; Lessing, 380; MKT, 759］に -sün が接尾した *getesün の借用形式と考えられる(41)．一方，14 世紀に編纂されたモンゴル語仏典『仏陀の十二の行ない（*Burqan baγsi-yin arban qoyar ǰokiyangγui*）』には，qaγalγ-a belčir tutum-dur getegül daruγa ileǰu「（瞿曇弥は）関門・岐路のそれぞれに斥候と監督を遣わして」という一節がみえ，同じく v. gete- に由来する getegül「斥候，哨兵」が在証される(42)．すなわち，モンゴル時代における getegül と *getesün > P. gatūsūn の両形式の併存が示唆される．

これを念頭におけば，M. todqaγul (< v. todqa-) の交替形式の *todqasun (< v. todqa-) がモンゴル時代に併存し，脱脱禾孫と漢字音写されたと想定することも，なお可能のように思われる．上述の諸種の職掌名詞とともに，新たな在証例の発見が俟たれる．

## 略号・参考文献（ABC 順）


AOH = *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*.

Arat, Reşid Rahmeti 1937: Uygur alfabesi. In: O. Ergin (ed.), *Muallim M. Cevdet'in hayatı, eserleri ve kütüphanesi*, İstanbul, 20 p., +6 pls.

Bazin, Louis 1991: *Les systemes chronologiques dans le monde turc ancien*. Budapest.

Bombaci, Alessio 1970: On the Ancient Turkic Title *eltäbär*. In: *Proceedings of the IX$^{th}$ Meeting of the Permanent International Altaistic Conference*, Naples, 1–66.

Bosworth, Clifford Edmund 2001: Notes on Some Turkish Names in Abu 'l-Faḍl Bayhaqī's *Tārīkh-i Mas'ūdī*. *Oriens* 36, 299–313.

BT XVI = Dalantai Cerensodnom / Manfred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung* (*Berliner Turfantexte* XVI). Berlin, 1993.

蔡美彪 2011:『八思巴字碑刻文物集釋』中國社會科學出版社.

蔡美彪 2012:『遼金元史考索』中華書局.

蔡明 2013:「元代銅權的初步研究」『考古』2013-6, 62–82.

青格力（Čenggel）2011:「蒙元時期蒙古文書中的"威懾語"」『歐亞學刊』11, 398–420.

陳新元 2016:「八兒赤與元代豹獵」『西域研究』2016-2, 60–71.

Chwolson, Daniil Abramovich 1886: *Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie* (*Mémoires de l'Académie Impériale des Sciece de St.-Petersbourg*, VII$^{e}$ série, t. XXXIV, no. 4). St.-Pétersbourg.

Chwolson, Daniil Abramovich 1890: *Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie* (*Mémoires de l'Académie Impériale des Sciece de St.-Petersbourg*, VII$^{e}$ série, t. XXXVII, no. 8). St.-Pétersbourg.

Chwolson, Daniil Abramovich 1897: *Syrisch-nestorianische Grabinschriften aus Semirjetschie*, Neue Folge. St.-Pétersbourg.

齊木德道爾吉（Čimeddorǰi）2008:「西南大學歷史博物館藏元代蒙古語八思巴文牌符釋讀及其他」『中央民族大學學報』2008-6, 62–70.

Clauson, Gerard 2002: *Studies in Turkic and Mongolic Linguistics*, 2. ed. London/New York.

Cleaves, Francis Woodman 1950: The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-Jui. HJAS 13-1/2, 1–131.


---

(41) 著者［下巻 809］が P. gatūsūn に再構するモンゴル語 *gete'ülsün は在証されない．Doerfer が M. v. gete- > *geteγ́ülsün >> *getū́sün > P. gatūsūn という借用経路を想定したのは，P. gatūsūn とカルムイク語 getū́l (~ M. getegül ~ gete'ül < v. gete-) との関係を説明するための便宜である［TMEN I, Nr. 353; cf. RKW, 135］.

(42) この getegül を，Poppe はチャガタイ語 kätä'ül ~ kātā'ūl「砦の長」を参照して "commander" と英訳したが［Poppe 1967, 30, 85, 120］，文脈からは「（関門・岐路を監視する）斥候，哨兵」とも解釈できる．18 世紀のテュルク語・ペルシア語辞典 *Sanglāḫ* も，T. kūtā'ūl (~ küteül ~ kātā'ūl ~ kätä'ül) について「qarā'ūl (< M. qaraγul) つまり哨兵（P. dīda-bān）に同じ」と説明する［TMEN III, Nr. 1658; cf. Kúnos, 141, küteül "Wächter"］.

Cleaves, Francis Woodman 1951: The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of Jiguntei. HJAS 14-1/2, 1–104.
Cleaves, Francis Woodman 1953: The Mongolian Documents in the Musée de Téhéran. HJAS 16-1/2, 1–107.
Cleaves, Francis Woodman 1954: *Tomuγ-a* / *T'o-mu-hua*. HJAS 17-3/4, 445–452.
Cleaves, Francis Woodman 1964: *Bökesün ~ Bökegül*. *Ural-altaische Jahrbücher* 35, 384–393.
Cleaves, Francis Woodman 1967: Addendum to "*Bökesün ~ Bökegül.*" *Ural-altaische Jahrbücher* 39, 49–52.
CYK = 村田次郎（編著）『居庸關』京都大学工学部，1957.
党寶海 2006:『蒙元駅站交通研究』崑崙出版社.
党寶海 2008:「蒙元史上的脱脱禾孫」『元史及民族與邊疆研究集刊』20, 1–9.
de Rachewiltz, Igor 1981: Some Remarks on Töregene's Edict of 1240. *Papers for Far Eastern History* 23, 38–63.
de Rachewiltz, Igor 1999: Was Toregene Qatun Ogodei's "Sixth Empress"? *East Asian History* 17/18, 71–76.
de Rachewiltz, Igor 2013: *The Secret History of the Mongols*, Vol. 3: *Supplement*. Leiden.
Doerfer, Gerhard 1975: Mongolica aus Ardabīl. *Zentralasiatische Studien* 9, 187–263.
d'Ohsson, Constantin Mouradgea 1835: *Histoire des Mongols*, Vol. IV. La Haye/Amsterdam.
董永强 2007:「元代銅權上的回鶻式蒙古文銘文 batman 考」『西北大學學報』2007-3, 80–85
Eccles, Lance / Lieu, Samuel N. C. 2012: Inscriptions in Latin, Chinese, Uighur and Phagspa. In: S. N. C. Lieu et al. (eds.), *Medieval Christian and Manichaean Remains from Quanzhou (Zayton)*, Turnhout, 129–149.
Eckmann = János Eckammn, *Chagatay Manual*. Bloomington/The Hague, 1966.
ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of the Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.
遠藤光暁 1990:「在欧のいくつかの中国語音韻史資料について」『開篇』7, 25–44.
遠藤光暁 2016:『元代音研究』汲古書院.
Endo Mitsuaki / Isahaya Yoichi 2016: Yuan Phonology as Reflected in Persian Transcription in the *Zīj-i Īkhānī*.『経済研究』8, 1–38.
Erkoç, Hayrettin İhsan 2008: *Eski Türklerde Devlet Teşkilâtı (Gök Türk Dönemi)*. Hacettepe Üniverstiesi, Yüksek Lisans Tezi. Ankara.
方齡貴 1991:『元明戯曲中蒙古語』漢語大詞典出版社.
方齡貴 2004:『元史叢考』民族出版社.
藤田豊八 1913:「ユール氏注マルコ・ポーロ紀行補正二則」『東洋学報』3-3, 443–448.
Franke, Herbert 1978: A Sino-Uighur Family Portrait. *The Canada-Mongolia Review* 4, 33–40.
Golden, Peter B. 1992: *An Introduction to the History of the Turkic Peoples*. Wiesbaden.
宮海峰 2010:「"脱脱禾孫" 語音考」劉迎勝・鳥恩（編）『元史論叢』第 12 輯，132–143.
GSR = Bernhard Karlgren, *Grammata serica recensa*. Stockholm, 1957.
ĞT/Boyle = John Andrew Boyle (tr.), *The Successors of Genghis Khan*. New York/London, 1971.
ĞT/TS = Rašīd al-Dīn Faḍl Allāh Hamadānī, *Ǧāmi' al-Tawārīḫ*. MS., İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan Köşkü 1518.
郭正忠 1993:『三至十四世紀中國的權衡度量』中國社会科學出版社.
Hambis, Louis 1945: *Le chapitre CVII du Yuan che*. Leiden.
Herrmann, Gottfried / Doerfer, Gerhard 1975: Ein persisch-mongolischer Erlass des Ǧalāyeriden Šeyḫ Oveys. *Central Asiatic Journal* 19, 1–84, + m. pls.
Hinz, Walther 1957: *Islamische Masse und Gewichte*. Leiden/Köln.
HJAS = *Harvard Journal of Asiatic Studies.*
本田實信 1991:『モンゴル時代史研究』東京大学出版会.
黄時鑑 1997:「元代四體銘文銅權的考釋」葉奕良（編）『伊朗學在中國論文集』第 2 集，北京大學出版社, 41–47.
稲葉穣 2010:「泥孰攷」『東方学報』85, 692–674.
Isahaya Yoichi / Endo Mitsuaki 2017: Persian Transcription of Yuan Chinese in the *History of China* of the *Jāmi' al-Tawārīkh* (MS. Istanbul, Topkapı Sarayı, Hazine 1654).『経済研究』9, 123–161.
井谷鋼造 2011:「オスマーン朝のハーカーンたち」『西南アジア研究』74, 1–27.
照那斯圖（Jaγunasutu）1991:『八思巴字和蒙古語文獻 II・文獻匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
照那斯圖（Jaγunasutu）2007:「釋蒙元時期長方形牌文字」『民族研究』2007-4, 65–69.

照那斯圖（Jaγunasutu）2010:「關于“不闌奚”的蒙古文對應形式 buralqi 及其相關問題」『中國史研究』2010-4, 170–173.

Kara, György 1990: *Zhiyuan yiyu:* Index alphabétique des mots mongols. AOH 44-3, 279–344.

Kara, György 2003: Medieval Mongol Documents from Khara Khoto and East Turkestan in the St. Petersburg Branch of the Institute of Oriental Studies. *Manuscripta Orietalia* 9-2, 3–40.

Kasai Yukiyo 2014: The Chinese Phonetic Transcriptions of Old Turkish Words in the Chinese Sources from 6th–9th Century. 『内陸アジア言語の研究』29, 57–135.

呼格吉勒圖（Kögǰiltü）・薩如拉（Sarula）2004:『八思巴字蒙古語文獻匯編』内蒙古教育出版社.

Kowalewski = Joseph Étienne Kowalewski, *Dictionnaire mongol-russe-français*, 3 vols. Kazan.

Kúnos = Ignaz Kúnos, *Šejχ Sulejman Efendi's Čagataj-Osmanisches Wörterbuch*. Budapest, 1902.

栗林均・松川節 2016:『『西藏歴史檔案薈粋』所収パスパ文字文書』東北大学東北アジア研究センター.

桑原隲蔵 1923:『宋末の提挙市舶西域人蒲寿庚の事蹟』東亜攻究会.

桑原隲蔵 1989:『蒲寿庚の事蹟』（東洋文庫 509）平凡社.

Lessing = Ferdinand D. Lessing, *Mongolian-English Dictionary*. Berkeley/Los Angels, 1960.

Ligeti, Louis 1963: Notes sur le vocabulaire mongol d'Istanboul. AOH 16, 107–174.

Ligeti, Louis 1966: Un vocabulaire sino-ouigour des Ming: Le *Kao-tch'ang-kouan yi-chou* du Bureau des Tracducteurs. AOH 19, 117–199, 257–316.

Ligeti, Louis 1967: Documents sino-ouigours du Bureau des Traducteurs. AOH 20-3, 253–306.

Ligeti, Louis 1972a: *Monuments préclassiques* 1: *XIIIe et XIVe siècles*. Budapest.

Ligeti, Louis 1972b: *Monuments en écriture 'phags-pa*. Budapest.

Ligeti, Louis / Kara, György 1990: Un vocabulaire sino-mongol des Yuan: le *Tche-yuan yi-yu*. AOH 44-3, 259–277.

劉曉 2008:「蒙元早期刑罰用語“按答奚”小考」『中國社會科學院歴史研究所學刊』5, 229–241.

松田孝一 1983:「ユブクル等の元朝投降」『立命館史学』4, 28–62.

松井太 2002:「モンゴル時代ウイグリスタンの税役制度と徴税システム」松田孝一（編）『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』科研費報告書（No. 12410096）大阪国際大学，87–127.

松井太 2004:「モンゴル時代の度量衡」『東方学』107, 166–153.

Matsui Dai 2009: *Dumdadu Mongγol Ulus* “the Middle Mongolian Empire.” In: V. Rybatzki et al. (eds.), *The Early Mongols: Language, Culture and History*, Bloomington, 111–119.

松井太 2015:「古ウイグル語行政命令文書に「みえない」ヤルリグ」『人文社会論叢』人文科学篇 33, 55–81.

松井太 2017:「敦煌石窟ウイグル語・モンゴル語題記銘文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1–160, +figs. 1, 3–7.

松井太 2018:「モンゴル命令文とウイグル文書文化」『待兼山論叢』史学篇 52, 1–27.

Matsui Dai / Watabe Ryoko 2015: A Persian-Turkic Land Sale Contract of 660 AH/1261–62 CE. *Orient* 50, 41–51.

松川節 1995:「大元ウルス命令文の書式」『待兼山論叢』史学篇 29, 25–52.

松川節 2002「新発表のモンゴル語命令文碑 3 件」松田孝一（編）『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』科研費報告書（No. 12410096）大阪国際大学，55–67.

Matsukawa Takashi 2007: In Regards to *aldaγ-situ* on the Sino-Mongolian Inscription of 1240.『西域歴史語言研究集刊』1, 290–295.

Maue, Dieter 2018: The Khüis Tolgoi Inscription: Signs and Sounds. *Journal Asiatique* 306-2, 291–301.

Maue, Dieter 2019: The Brāhmī Script on the Bugut Stele. *Journal Asiatique* 307-1, 109–119.

MDQ = 吉田順一・チメドドルジ（Čimeddorǰi）（編）『ハラホト出土モンゴル文書の研究』雄山閣，2008.

宮紀子 2004:「徽州文書新探」『東方学報』京都 77, 222–160.

宮紀子 2011:「ブラルグチ再考」『東方学報』京都 86, 740–693.

宮紀子 2014:「スルタン・アフマドの金宝令旨から」杉山正明（編）『続 ユーラシアの東西を眺める』京都大学大学院文学研究科，15–52.

MKT =『蒙漢詞典（増訂本）』内蒙古大學出版社，1999.

護雅夫 1967:『古代トルコ民族史研究』第 1 巻．山川出版社.

森安孝夫 1991:「ウイグル=マニ教史の研究」『大阪大学文学部紀要』31/32.

森安孝夫 2015:『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会.

Mostaert, Antoine / Cleaves, Francis Woodman 1952: Trois documents mongols des Archives Secrètes Vaticanes. HJAS 15-3/4, 419–506.
Moule, Arthur Christopher 1957: *Quinsai*. Cambridge (UK).
Moule, Arthur Christopher / Pelliot, Paul 1938: *Marco Polo: The Description of the World*, 2 vols. London.
那珂通世 1915a:「校正増注元親征録」『那珂通世遺書』大日本図書.
那珂通世 1915b:「成吉思汗実録続編」『那珂通世遺書』大日本図書.
中村淳 2005:「山東霊巌寺大元国師法旨碑」『駒澤史学』64, 29–43.
中村淳・松川節 1993:「新発現の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8, 1–92, +pl. I–VIII.
牛汝極 2008:『十字蓮花』上海古籍出版社.
Niu Ruji 2009: A Comparative Study on the Nestorian Inscriptions from Semireche, Inner Mongolia and Quanzhou. In: D. W. Winkler/Tang Li (eds.), *Hidden Treasures and Intercultural Encounters*, Wien/Münster, 101–108.
Nyamaa 2005: *The Coins of Mongol Empire and Clan Tamgha of Khans (XIII–XIV)*. Ulaanbaatar.
小野浩 1993:「「とこしえの天の力のもとに」」『京都橘女子大学研究紀要』20, 209–186.
愛宕松男 1970:（訳註）マルコ=ポーロ『東方見聞録』1（東洋文庫 158）平凡社.
小澤重男 1985:『元朝秘史全釈（中）』風間書房.
小澤重男 1986:『元朝秘史全釈（下）』風間書房.
小澤重男 1987:『元朝秘史全釈続攷（上）』風間書房.
小澤重男 1997:『蒙古語文語文法講義』風間書房.
Özyetgin, Ayşe Melek 2004: Eski Türklerde ödeme araçları: kâğıt para *çav*'ın kullanımı. *Modern Türklük Araştırmaları Dergisi* 1-1, 90–105.
Pauthier, Guillaume 1865: *Le livre de Marco Polo*, 2 vols. Paris.
Pelliot, Paul 1925: Les mots à *h* initiale, aujourd'hui amuie, dans le mongol des XIII$^{e}$ et XIV$^{e}$ xiècles. *Journal Asiatique*, avril-juin 1925, 193–263.
Pelliot, Paul 1959: *Notes on Marco Polo*, Vol. I. Paris.
Pelliot, Paul 1963: *Notes on Marco Polo*, Vol. II. Paris.
Поппе, Николай 1938–1939: *Монгольский словарь Мукаддимат ал-адаб*. Москва/Ленинград. (Rpt. Farnborough, 1971)
Poppe, Nicholas 1967: *The Twelve Deeds of Buddha*. Wiesbaden.
PTMD = Völker Rybatzki, *Die Personennamen und Title der mittelmongolischen Dokumente*. Helsinki, 2006.
PUM = Gottfried Herrmann, *Persische Urkunden der Mongolenzeit*. Wiesbaden, 2004.
丘光明 1992:『中國歷代度量衡考』科學出版社.
RH = Peter B. Golden (ed.), *The King's Dictionary: The Rasūlid Hexaglot*. Leiden/London, 2000.
RKW = Gustaf John Ramstedt, *Kalmückisches Wörterbuch*. Helsinki, 1935.
佐口透 1976:（訳註）ドーソン（d'Ohsson）『モンゴル帝国史』5（東洋文庫 298）平凡社.
Saitô Yoshio 2008: *The Mongolian Words in the Muqaddimat al-Adab: Romanized Text and Word Index*. Tokyo.
Šayḫ al-Ḥukamā'ī, 'Imād al-Dīn・渡部良子・松井太 2017:「ジャライル朝シャイフ=ウワイス発行モンゴル語・ペルシア語合璧命令文書断簡２点」『内陸アジア言語の研究』32, 49–149.
Schwarz, Florian 2002: *Balḫ und die Landschaften am oberen Oxus XIV c Ḫurāsān*, III. Tübingen/Berlin.
Serktaya, Osman Fikri 1981: Timürlü Şeceresi (Topkapı Sarayı Müzesi, Hazine 2152 v. 32–43). *Sanat Tarihi Yıllığı* 9/10, 241–258.
Shahgoli, Nasser Khaze 2017: Uygur yazısı ile ilgili bir belge. *Modern Türklük Araştırmaları Dergisi* 14-3, 153–190.
Soudavar, Abolala 1992: *Art of the Persian Courts*. New York.
杉山正明 2004:『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会.
鈴木宏節 2005:「突厥阿史那思摩系譜考」『東洋学報』87-1, 37–68.
高田英樹 2013:（訳註）マルコ=ポーロ・ルスティケッロ=ダ=ピーサ『世界の記：「東方見聞録」対校訳』名古屋大学出版会.
高田英樹 2019:『原典 中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会.
田先千春 2006:「古代ウイグル語文献に見える baγ について」『東洋学報』88-3, 01–28.
TMEN = Gerhard Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, 4 vols. Wiesbaden, 1963–1975.
Tumurtogoo 2006: *Mongolian Monuments in Uighur-Mongolian Script*. Taipei,

Tumurtogoo 2010: *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script*. Taipei.
USp = Wilhelm Radloff, *Uigurische Sprachdenkmäler*. Ed. by S. E. Malov. Leningrad, 1928.
Vásáry, István 2009: Mongol or Turkic? Notes on *bökevül*, a Military and Court Official of the Turco-Mongolian Polities. In: V. Rybatzki et al. (eds.), *The Early Mongols: Language, Culture and History*, Bloomington, 195–207.
Vovin, Alexander 2018: An Interpretation of the Khüis Tolgoi Inscription. *Journal Asiatique* 306-2, 141–151.
Vovin, Alexander 2019: Groping in the Dark: The First Attempt to Interpret the Bugut Brāhmī Inscription. *Journal Asiatique* 307-1, 121–134.
渡部洋ほか 2012:「漢文・モンゴル文対訳「達魯花赤竹君之碑」（1338 年）訳註稿」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』29, 107–238.
家島彦一 2002:（訳註）イブン=バットゥータ『大旅行記』第 7 巻（東洋文庫 704）．平凡社.
四日市康博 2015:「ユーラシア的視点から見たイル=ハン朝公文書」『史苑』75-2, 257–300.
吉田豊 2011:「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, 1–41.
吉田豊 2018:「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 155–182.
吉田豊 2019:「ブグト碑文のソグド語版について」『京都大学文学部研究紀要』58, 1–33.
Yule, Henry 1866: *Cathay and the Way Thither*, 2 vols. London. (Rpt. New York, 2010)
Zieme, Peter 2015: *Altuigurische Texte der Kirche des Ostens aus Zentralasien*. Piscataway.

**付記**　本稿は JSPS 科研費 17H024010, 16K13286 による研究成果の一部である．